



ハタラクヒト

\*ペディア18

< 勅使河原正直 氏 >

田中永子

## はじめに

---

はじめまして、田中コーチングの田中永子と申します。

私はNLPやコーチング、ソースなどを学び、それらのノウハウや考え方を活かしたコーチングを提供しております。

この度、新しい企画といたしまして、おもに愛知県名古屋市、刈谷市を中心にお仕事をしていらっしゃる経営者の方々や企業や組織の幹部の方々へのインタビュー企画をスタートいたしました。

この企画を始めようと思った趣旨は、将来の先行きが見えづらい現代社会において、第一線でバリバリと働いていらっしゃる現役の経営者の方々、企業幹部の方々が、今何を考えているかということに興味を持ったこと。そして、その考え方に基づいてどんなアクションを起こしていらっしゃるのだらうと思ったことにあります。

また、こうした第一線でご活躍の方々のさまざまな角度からのメッセージを他の多くの実業家の方々と共有したいと思ったことも大きなモチベーションとなっています。

その他、高校生や大学生の方、これから社会に入っていこうとする方にも読みやすいように心配りをしておりますので、ぜひご愛読をいただけましたら幸いです。

個人的な考えではありますが、愛知県はモノづくりの聖地であると考えております。このモノづくりの聖地である愛知県にあって、日夜、しのぎを削っていらっしゃる多くの企業人、組織人の生の声をお届けしたいと思っております。

よって、このサイトの大きな特徴として、インタビュー形式のログをそのまま読者のみなさまにお届けするというスタイルを取っています。インタビューさせていただく私と、インタビューを受けてくださる方の真剣勝負。

行間の中に潜む間も大切なメッセージだと考えております。

記念すべき第18回は、

株式会社エフエムキャッチの社員でラジオDJのTESHIさんです。

TESHIさんは、音楽活動を経て、飲食店経営、その後、株式会社キャッチネットワークに入社。現在はエフエムキャッチへ出向し、番組制作や営業企画など全般に携わりながら、ラジオDJをしています

TESHI氏



『株式会社エフエムキャッチ』

おもに番組編成・制作を担当しており、ラジオDJ、テレビタレントもしています。  
地域の人に愛される、使ってもらえる地元のラジオ局！がモットー

趣味はアウトドアと買い物。物欲とポジティブが止まらない・・・。

好きな本は子供向けの絵本“はらぺこあおむし”色彩感覚とズーっと第一線っていうのがたまらない・・・

好きな音楽はHip Hop 主にJAZZサンプリングなどの手法を使った、男臭い90年代のものが好物。

連絡先：株式会社エフエムキャッチ

メール&お問い合わせ：ホームページの問い合わせフォームから <http://838.fm>

◆DJという仕事についたなれそめ

田中永子（以下：田中）： 勅使河原さんはKATCH（キャッチ）の社員さんだとか。私、DJさんって、社員さんではなく専属でされているのかと思ってました。

勅使河原正直さん（以下敬称略：勅使河原）： そうです。普通はそうです。この中全員そうなんですけど、ぼくだけが社員で（笑）

田中： どういう経緯で、こういう感じになったんですか？

勅使河原： いきさつ……。そもそもは、音楽活動をやっている。

田中： ええ。

勅使河原： そのグループで別のラジオ局で番組をやったりとかしてたんですよ。キャッチネットワークでは、テレビの番組にそのグループとして出てて。

田中： へえ。ゲストさんだったということですか？

勅使河原： そう。普通に『出演者そのいち』っていう感じだったんですけど。Pitch FM（ピッチエフエム）が開局したのが今から11年、12年前かな。その頃の番組担当者さんから「来年うちもラジオ局やるよ」みたいなことを言われて。

田中： はい。

勅使河原： 開局前の全体オーディションみたいなのをやるんですけど、そこに一回来てほしいって言われて。で、グループで行ったんですよ。

田中： ええ。

勅使河原： 開局して、一番最初はそのグループの番組もやっていた。で、ここが開局する前から、他でぼくだけ自分のラジオ番組があって。それとグループにも番組もあるっていう。それは、たまたま、ぼくのご近所さんに結構大きなラジオ局持ってる有名な人がいて、（その方に）声をかけていただいて。

田中： ええ。

勅使河原： で、近所のコンビニで会ったときに、「CD出来たから聞いて下さいよ」ってCD渡したんですね。それまでも地域のお祭とか、よくそういうところで会ったりしてたんです、イベントで。その方は司会をやったりとか、ぼくらはゲストで出る。

田中： じゃあ、もうお顔は知ってらして。

勅使河原： はい、もうすごい、知ってて。で、CDをお渡ししたら、その10分後ぐらいに電話かかってきて「テシさん、ラジオやんない？」って言われて。

田中： うん。

勅使河原： 「うん、やるやる」って、そのまま。

田中： あははは。えらく軽いノリで（笑）

勅使河原： やるやる一って答えたら、FM岡崎さんでラジオ番組をやることになって。その時はグループの番組だけだったですね、一番最初は。やり始めて1か月ぐらいしたら、「お昼のワイド番組やってみない？」って岡崎で言われて。それがぼくだけだった。あとアシスタントの女性と一緒にやってたんですけど。

田中： ええ。

勅使河原： 今もピッチでやってるようなお昼のワイド番組のパーソナリティとしてやるようになった。それで、そのまま続けて。ここのオーディションを受けて、ここに入ってしばらく普通にタレントさんというような感じでやっていて。

田中： ええ。

勅使河原： ぼく、飲食店もやってたんですけど。

田中： ふふふ。たくさん草鞋履いてる（笑）

勅使河原： 飲食店はバーをやってたんです、安城市で。始める時に人脈を広げたいっていうのがあって。で、軌道に乗ったら3年ぐらいで自分は離脱したいなと。あとは誰かやってくれればいいなって感じだったんですけど。

田中： うん。

勅使河原： で、ちょうど3年経って、やめるって言ったら、当時の今のぼくと同じ立場の人から、「ちょっとピッチFMに来ない？」……みたいな。「やめるんでしょ？ お店」みたいな話になって。「ちゃんと扱ってくれるんなら、いいよー」ぐらいの感じで。

田中： ノリで（笑）

勅使河原： ノリだったんです。で、面接を受けることになったんですね。FMキャッチって会社は、全員キャッチからの出向社員なんですけど、そんなことは全然知らずにラジオの人から来てほしいと言われて、キャッチネットワークの面接を受けることになった。

田中： ええ。

勅使河原： で、受けたら入ることになって。まずはテレビの方に入ったんですね。で、そのまま入ったと同時に、テレビで自分が司会をするレギュラー番組が始まって。ラジオはそのまま変わらず継続してて。ずーっとやってたんですけど、他の仕事もたくさんやり……。

田中： はい。

勅使河原： ある日突然、ここの社員の子がちょっとお休みすることになった。隣はいっぱいいるんですけど、こっちは4人しかいない。ひとり欠けると大変なことになる。

田中： それは大変なことですわ。

勅使河原： で、それはまずいってことになって。上司から、FMの方に行ってくれないかと言われて、今FMが3年目ですかね。

田中： キャッチさんに入られて何年になるんですか？

勅使河原： えーと、トータルで7年ぐらいですかね。

田中： なんか、おもしろいですね。いろんな経歴がある感じで。

勅使河原： そうなんですよ。会社員っていうのが、2回目ですね。

田中： ふふっ。どんな感じだったんですか？（笑）

..... つづく ^^

◆通勤途中に会社を辞めようと決意し音楽の道へ

勅使河原： 1回目は高校生の時で。もうなんにも考えてないですよ、その時は。

田中： うん。

勅使河原： 18歳で進学するのか、就職するのかという選択があって。まあ、遊びたいばかりなんで、就職してお金を貰えた方がいいっていう考えになってですね。その頃、高校時代はもっと相当スマートで（笑）

田中： あははは。

勅使河原： サッカーをやってたんですけど。で、サッカーやってる子が毎年ひとり誰か行くという会社があったんですよ、刈谷で。そこに就職したんですよ。18歳で。で、その頃にはすでに音楽活動というのをやってましてですね。

田中： 高校からバンドしてた。

勅使河原： はい。ラップグループなんですけどね。そういうのをやっていて、結構お客さんもいっぱい来てくれるような感じになってたんですよ。

田中： へええ。カッコいいな。

勅使河原： で、それをやりながらお金を稼ぐということで、ちゃんと就職しようと思って就職したんですけど。就職した途端にまた数か月で絶好調になるんですね、その音楽活動が。

田中： 音楽活動が。

勅使河原： ほんと、呼ばれまくるという。ていうことになって。もうこれは音楽で生きていくんじゃないかと。18歳の若造で思いまして（笑） もう音楽で生きていくしかないなって。

田中： あっはははは。

勅使河原： 就職した会社では、新入社員の最初の3か月は、自家用車とかバイクとかで通っちゃいけないって言われてたんですよ。とすると、駅まで行って電車に乗って、そこから会社のバスに乗って行かなきゃいけないっていうルールだったんですけど。



田中： ええ。

勅使河原： そのバスに揺られながら、「俺こんなことしてる場合じゃねえな」って思って。

田中： ふふふふ。

勅使河原： 別に誰にも相談してないのに、ぼーっと窓の外を眺めながら、それを思ってたんです。

田中： うんうん（笑）

勅使河原： ライブもずっとやってるから眠たいんですよね。「違うな、これ」って、そのままバスを降りて自分のロッカーに行かず職場の方に行って「ぼく、辞めますー」って。

田中： あっははははは。

勅使河原： そのまま言いに行ったんです。で、「おいおいおい」ってなるんですよ。

田中： うんうん。

勅使河原： おいおいってなって。そのまま事務所みたいところで待たされ、人事の人がやって来たりして。まだ新入社員だったんで。

田中： だって、まだ3か月かそこらなんでしょう？

勅使河原： そうそうそう。厳密には2か月。

田中： 経ってないんだー、3か月（笑）

勅使河原： 3か月经ってないです（笑） で、「どこでもいい。どの部署でもいい。好きなところ、興味のある部署を選んでいいよ」なんて言うんですよ。たまたまちょっと、入社試験かなにかで成績がよかったみたいで。

田中： すごいじゃないですか。

勅使河原： 「どこでも選んでいいから」「そんな早まるな」「そんなに簡単に音楽で食ってけねーぞ」と、子供に諭すように言われてるんですけど、こっちはもうすごい勢いなんです。

田中： うんうん（笑）

勅使河原： いやいや。「ぼくはだいじょうぶです。その道で生きていくんで辞めさせてください」っていうのを一日やり。

田中： 一日！？ 一日説得されたの？

勅使河原： そうなんです。ずーっと一日中出してくれなかったです。ですけど、もう辞めるってことになったんですね。

田中： ええ。

勅使河原： 辞めて、そこから音楽活動だけでって始まるんですけど。そんな感じでいて、音楽活動と言っても、その頃いろんなことを真剣に考えてないので。

田中： ノリの部分って、ありますもんね。

勅使河原： そうそう。ほとんどノリなんですよ。で、調子いい風が吹いて来たなっていうのは感じてるんですよ。でも実際（会社）辞めると給料ないじゃないですか。

田中： うん。

勅使河原： いくら人気があるっていても、ライブのギャランティなんですよ、収入源は。で、ライブのギャラっていても、グループなんですよ。今から考えるといいギャランティを貰ってたんですけど、それをメンバーで割ると大したことないですよ（笑）

田中： 何人グループだったんですか？

勅使河原： 4人でした。アメリカ人がひとり、日本人が3人。で、4人の内2人はお仕事してる。ぼくともう1人は仕事をせずに音楽だけ。だから2人は均等割りしちゃうと、結構厳しい感じだったんですね。

田中： うん。

勅使河原： 全部勢いなんで、車もローンとかで買ってるし、携帯も持ってるし、お支払いがあるじゃないですか。

田中： あるある（笑）

勅使河原： そういうのを払うと「あれ？」みたいな感じになるんですよ。「あんまり遊べねーな」って。すごくお金のない時期だったんですけど、音楽活動してて。それでCD出そうってことになって。自分たちで曲を作っていくんですけど、その間に、他のメンバーもだんだん仕事辞めてくんですよ。みんなお金がないんですよ。

田中： あはははは。

勅使河原： お金のない4人なんですよ。でもライブに行くと、同世代、高校生や二十歳ぐらいまでの人がお客さんだったんですけど、そういった人たちからはキラキラしてるところを見せなくちゃいけないんで、無理して服も靴もピカピカだしてっていうのをやってるんで、よけいお金がないんですよ。

田中： うん。

勅使河原： いつもお金がなくて、大変だったんだけど。CDを作るのも自主制作だったんで、プレスするお金なんかも、なんとか捻出して。レコーディングもなんとかやって。CDをリリースすることになったんです。……と、こんな話をしてていいんですか？

田中： いい、いい。全然いいです。

勅使河原： その時、ぼくがリーダーというか、方向性を決めてリードする係で。年齢は、ぼくと同じ年がひとりと、アメリカ人がひとりと。もう1人は年が1こ上だったんですけど。ぼくがその役割になってて。

田中： ええ。

勅使河原： いくら人気があるグループといっても、世の中の人ほとんど知らないんですよ。なので、知らないやつが突然出てきたって雰囲気を作れたら楽しいだろうなって思ったんですね。

田中： ええ。

勅使河原： なので、ポスターとか作って。その当時CDショップがいっぱいあったんで。視聴機に入ったり、面出しされたり、ポスターが貼ってあったり、店内でかかったりっていうのを、

全部のCDショップでやれば、「なんだ？ なんか出てきたぞ」ってなるだろうと。そういう作戦を思いついたんですね。

田中： お一一。

勅使河原： でも4人しかいないんですよ、メンバーが。で、考えて「よし、ここはおれたちも営業マンになって頑張ろう」って。一応自分たちが出すレコードレーベルみたいなのを形として作りあげて、名刺も作って。ぼくの家にも別の電話回線とかFAXとかも用意して。そうすると連絡もつくようになるんで。

田中： すごい。

勅使河原： で、あとはお店に全部挨拶に行って、その全部に置いてもらうことが大事。それをリリース前に全部やろうって。その時は勢いもあって「じゃあ、エリアをどうするか？」ってなって。愛知・岐阜・三重、全部行こう。全ショップ全部回ろうって。

田中： わー。

勅使河原： 演歌しか置いてないようなお店も全部やろうってということで、4人を2つの班に分けて計画を作って、この班は今日は愛知部隊と岐阜部隊とか。その頃、みんなほぼ一緒に住んでいるような感じになってたんで、朝から出発するんですよ。それで回るんですけど、ガソリン代を出すのが大変で。

田中： ですねー。

勅使河原： あとは昼ご飯とかも食べられないぐらいなんですよ、お金がなくて。なんすけど、おにぎりを作って、2班に分かれて（笑）

田中： ほんとに手弁当で（笑）

勅使河原： そうそう（笑） そうなんですよ。車の中で食べてたりして。でも、その計画を成功させたいっていうのがあって。それをですね、毎日毎日。全員無職なんで、毎日やってたら20日間ぐらいで、ほんとに全部まわったんですよ。

田中： すごいですねー。

勅使河原： タウンページとかに載ってるCDショップを全て回ったんですよ。更に行きす

ぎちゃって、浜松とかまで行っちゃって。

田中： あはははは。

勅使河原： 浜松のCDショップも全部回れて。あと、そういう世代が来るっぽい服屋さんにもサンプルのCDを渡して、ポスターを貼ってもらって。ってすると、ある程度繁華街的なところでは大変なことになるんですよ。ポスターがバーツでならんで。それをやってもらって。

田中： うん。

勅使河原： その頃インターネットも微妙だったんですけど、豊田のガズドットコムっていう中古車検索のサイトが始まった時に、一番最初は『ケツメイシ』が、ガズドットコムのCMソングに選ばれて、第2回目のオーディションをウェブ上で募集してたんです。投票でランキング上位になった人に決まるというもので。そこに音源を出して応募して。とにかく、ちょっと話題になろうと。

田中： うん。

勅使河原： そうしたら、忘れもしない。リリース日は、2000年の東海豪雨があった時、9月11日。

田中： また、すごい日に（笑）

勅使河原： リリース日の時には、みんなそういう活動にも慣れてきてたんで、誰もやってくれないから自分たちでリリースツアー組んじゃおうってなって。岐阜のクラブとかライブハウスで打ち合わせをした日が、リリース日の前の日の夜中で。

田中： ええ。

勅使河原： 朝方2時か3時ごろそのお店を出たら、もう道が大変なことになってた（笑）

田中： 冠水とか、してましたもんね。

勅使河原： そうなんですよ。で、岐阜から帰ってくるんですけど、西枇杷島とかあの辺を越えて名古屋に入ったら、どこにも行けなくなっちゃった。八方塞がりの的になって、そのままリリース日を迎えたんですけど（笑）

田中： ぷ。あはははは。

勅使河原： リリース日なのに全然帰れなくて。夕方に、ぼくが家に着いたら追加注文のファックスがめっちゃ来てたんですよ。

田中： すっごいじゃないですかー。

勅使河原： やっぱ行ってなって。もう在庫もそのまま全部はけて、追加プレスとかもしてやったんですけど、そこでようやくCDが売れて。東海3県だけですけど。

田中： いや、すごいです。

勅使河原： その当方で5000枚くらい売れた。一気に5000枚ほど売れたんで、また増産してもうちょこっと売れたんですけど。

田中： ええ。

勅使河原： それが自分たちでやってるので、その出した価格分がそのまま入ってくる状態になって。もう一気におにぎりグレードアップするとか（笑） 外食できるようになる感じなんですね。

田中： すごいね、すごいね（笑）

勅使河原： で、「わーい。わーい」ってなって（笑） そうなると、いろんなことが相乗効果としてうまく行って。なんか各町でそういうジャンルをやってる人たちの中で話題になり、「あいつら、誰なんだ？」って。なんでも一番がよかったんで、一番最初ホームページもちゃんとしたのを作ってたんですよ。

田中： へええ。

勅使河原： そうすると、そこにたどり着くじゃないですか、検索すると。で、いろんなところからオファーが来たり、更にガズードットコムランキングは、4000組ぐらい出しているのに上位20位までの中に入ってるんですよ。

田中： すごい。

勅使河原： 応援してくれる人も結構多くて。刈谷にあった飲食店とか。その頃みんなパソコン

1台なんて持ってない時代なんで、パソコン20台ぐらい揃えてインターネットを引いて。

田中： うん。

勅使河原： ガズーは、会員登録した人が、ひとり1日1回だけ投票できるシステムなんですね。それをみんな家では出来ないから、みんなをイベントに呼んで、その人たちに登録してもらって、1票投票してもらおうっていう、イベントもやってくれて、すごい順位も上がって。どんどん上がっていったんですけど、残念ながら最終の時に21位で。上位20組に入らないと東京でライブが出来なかったんですね。

田中： あとひとつだったんだ。

勅使河原： そうそう。あとひとつが上げられなかったんです。みんな最後そういうやり合いで。

田中： すごい、競り合ってたんですね。

勅使河原： そうなっちゃったんですけど、話題としてひとつ作れて、毎週5～6本のライブをやるようになって。愛知・岐阜・三重・静岡ぐらいで。そうやってしてたら、今度は大手広告代理店の方々から「うちがやっているイベントのライブに出てほしい」って言われて、デビューしたてのアイドルグループとかと一緒にイベントに出たりということをやりに始めて。ぼくたちはインディーズっていうか。

田中： ええ。

勅使河原： 流通もその時自分たちで直接納品してて。流通業者にかかってなかったんで、そんなに爆発的には広がってなかったんですけど、そのイベントのおかげで。そのショッピングモールにTUTAYAがあるんですけど、そこで「即売会をやってほしい」ということになって。

田中： うん。

勅使河原： さらに、その代理店の方からTUTAYAの流通の方に、こいつらのを流通かけろという事になって。通常はそんな単品でやってるものが流通にのることないんですけど、TUYATAオンリーの流通にのって世の中に広まった。

田中： すごい！ 普通はレコード会社と契約して、出したりするんですよね。

勅使河原： そうです。そうです。

田中： インディーズから、大手と契約してそこからデビュー、リリースとか。

勅使河原： はい。インディーズで流通する手もあったんですけど、それはもう一か所か二か所の会社しかなくて。それらをまとめる会社があったんですね。でも、そのオーディションを通過しないと、その流通にはのせてもらえなかったんで、結構なハードルの高さでもあったんですけど。

田中： はい。

勅使河原： 流通に勝手にのることになって。また幅が広がり、うまくいんですけどお。

田中： うん。

勅使河原： その後、諸事情により、解散していくという（笑）

田中： ぷ。まあ、人気グループとかも終わったりとか、ありますもんね。

勅使河原： そう。いろいろあったんですよ。ぼくたちがやってたのは、ヒップホップで。

田中： ええ。

勅使河原： 今は普通なんですけど、10何年前とかって「ヒップホップって、なに？」っていう状態だったんで。「なんか、悪そうだね」とか。

田中： あー。だぶだぶのトレーナーとか着て、キャップかぶって。

勅使河原： そう。アメリカの黒人さんの音楽で、ちょっとギャングとか、そう「悪いことしてそうな人」ってイメージが、映画とかからあったんですね。で、ぼくらは音楽が好きでやってたんですけど。ちょっとメンバーの中で、文化全体に興味をそそられるっていうか。好きで悪いことするとか、そういうんじゃないんですけど。なんか、そういう雰囲気になって行くというのか。

田中： ふふふふ。

勅使河原： まあ、悪そうな感じに。ぼくは普通で、全部のアポがぼくに電話がかかってくるぐらいで、ひとり営業マンみたいな感じだったんですけど、まあスキンヘッドで、つるつるって感



じなんで。

田中： ぷ。

勅使河原： 後に会社に入ってみて、わかるんですけどお。そんな人あんまりいないんだなっていう（笑）

田中： あはははは。

勅使河原： それが解散してから、ピッチ（ピッチFM）が開局したぐらいの感じなんですけど。解散した時はまた違うグループでやってたりもしたんですけど、やっぱり解散したグループのインパクトが強すぎて続かないっていう。

田中： だって活動自体も長いですよ。高校ぐらいからずっと。

勅使河原： そうですね。ずーっとやって。ピッチFMに、今でもゲストで出てくれるんですけど、ホームメイド家族とか、シーモさんとかね。その辺とかはその出た当時一緒に回ったりとか、そういうのもあって。

田中： ええ。

勅使河原： だからその時一緒にライブしたような人たちの中で、メジャーデビューしてないのはぼくらぐらいで。

田中： あー、そうなんですか？

勅使河原： ノーバディノーズもしてるし、カルテットというグループとか。みなメジャーデビューして。そんななかから、まだ活動してるっていうと数組なんですけど。音楽は調子よかったですね。

田中： 私、SOUL'd OUT（ソールドアウト）が好きで。

勅使河原： えっ！？ あ、はい、はい。そうなんですか？

田中： 大好きです。

勅使河原： ぼくは直接には面識はないんですけど。ぼくらからいうと、一世代若いみたいな感

じで。ソールドアウトとかは次の世代。

田中： もう大好きです。

勅使河原： はい。解散しちゃいますね。

田中： そう！ 4月解散じゃないですかー。超悲しくて。

勅使河原： そうなんですか（笑）

田中： しばらく休止してて、なんでーとか思ってたらディギーがソロ出して、「ソロ出したー」って（笑）

．．．．． つづく ^^

◆音楽グループを解散したあとファッションブランドを立ち上げて大当たり

勅使河原： まあ、いろいろ（笑）ほんと音楽の世界でやってる人たちとは、今も話すんですけど、いろんな大変なことがあるんですよ。はい。まあ大変だなーって思いますけど。

田中： ふふふふふ。

勅使河原： その、解散したらやることないじゃないですか（笑）

田中： うん（笑）

勅使河原： ライブの、音楽活動の影響があって。音楽ってファッションとセットなってるんですね、カルチャーというか。それで服のブランドを立ち上げてる人たちもいっぱいいて。その解散した頃は『裏原系（裏原宿系）』が世の中では大ヒットしてて、その手法がウケていた。その販売手法というか。

田中： ええ。

勅使河原： ブランドがあって、それを取り扱いたいところが全部置けるわけじゃない。「愛知県は、ここだけ」とか。

田中： 限定しちゃうんですね。

勅使河原： そう。必ず販売店を限定。その中で大ヒットしたところは、直営店でしかやってなかったんですけど。ぼくは音楽つながりで、デザイナーさんとか、そういう会社をやってる人たちとつながっていったんです。

田中： うん。

勅使河原： で、ヒップホップ系、そういうブランド、当時いろんなのが出来たんですね。その世界にいたので、優先的にぼくのところで揃っちゃうんですよ、そういう人気のものが。入荷すると売れるという流れに。

田中： ええ。

勅使河原： そのお店をやり始めたのが、安城市の中心市街地の商店街活性化事業として、チャレンジショップみたいなもので。若者に安くお店を貸して活性化しようという企画があって、そ

れにのっかったんですよ。

田中： ええ。

勅使河原： そしたらめちゃくちゃ安いですよね、家賃が。2万～3万な感じで、ひとりでやれば全然余裕だろうと。で、やったら、大ヒットして。

田中： すごい。

勅使河原： でも、大きい店舗スペースで間仕切りして何店舗って入るようにしてあるので、他にもいらっしゃるんですよ。で、みなさん手作りものを売っていて、革細工とかシルバーとかアクセサリーとか。でも、ぼくは一着が何万円とかのやつを売ってるんで。

田中： 単価が違いますか？（笑）

勅使河原： もう、全然違います。あちは10円とか100円で売ってるのに。で、なかなか、こう、同じ仲間だぜ的には……ね。

田中： ちょっと、違う（笑）

勅使河原： ちょっとね、違ってきちゃうんですよ。そうすると周りから「あそこのお店はうるさい」とか、ぼくの店は手前にあったんですけど、「あのお店の雰囲気、奥まで入って来れない」とか、段々なってくるんです。なんか空気がそんな風になっちゃって。

田中： もー。

勅使河原： でも、決められた期間があったんで、みんなくるくる変わって行くんです。ぼくもその期限が終わって。

田中： どれくらいされてたんですか？

勅使河原： それはね、2年ぐらいかな。で、ぼくの期限が終わると同時に、その企画が終わったんです。そのお店続けたかったんですけどね。その店舗を借りるには月60万円って言われたんですよ。

田中： すごく高いじゃないですか。

勅使河原： 高い。ぼくはその前、3万円で借りてた。しかもあんまり内装工事も出来ないっていうんで、「この状態で60万で借りるのは、ちょっと難しいな」って思って、すっぱりやめようって。

田中： お店自体を？ 他でやろうとかではなく？

勅使河原： はい。もうやめようって思って。で、その当時の流れとしては、そういうブランドがありふれてきて、このまま長くは続かないだろうなって。

田中： なんかすごく鼻が利く感じ。

勅使河原： このままじゃなくてオリジナルで作って行かなきゃって、当時作ってたんですけど、それも結構大変で。韓国行って作ったりとか。

田中： ご自身で行かれてたんですか？

勅使河原： そうですね。ぼくがデザインして韓国行って、革のジャンパーを作ったりとか。安いんですけどロットはそんなに作れないんで。月せいぜい100とかなんですよ。でも、その100を空輸すると費用が掛かるんで、船で1か月くらいかけてとか（笑）

田中： うーん。

勅使河原： それもすごく儲かってはいたんですけど、トータルコーディネートがなかなか出来ないんですよね、自分だけで作っても。ジャンパー、バッグ作れました、中に着るシャツも出来ました。でも靴とかは出来ないし、とろいろ壁もあって。

田中： ええ。

勅使河原： この状態で、それこそワンデザインのサイズがちょっとあるだけで、全部売れるかっていうと、そうでもないじゃないですか。こういうブームもそのまま流れて行っちゃうだろうなって思ってたんで、やめたんですね。

田中： うーん。

勅使河原： で、やめてもラジオはずーっと続けてるんですね。ラジオやりながら、どうしようかなあって。

田中： ええ。

勅使河原： ぼく、めちゃくちゃお酒を飲むタイプだったんですよ、その当時。もう毎晩お酒を飲みに行く。それはおにぎり豪華になった時からはじまったんですけど（笑）

田中： ぷ。あははは。

勅使河原： もう、ほんと単純ですよ。日々のお金が全然なかったのに、パーンってお金が入ってきて「お金、俺あるわ」って状況になっちゃったから。

田中： 18かそこらで（笑） ぼくちゃんが。

勅使河原： そうなんですよー。くそガキが（笑） そんなことになって。で、毎晩飲み歩くようになっちゃったんですよ。

田中： ええ。

勅使河原： それがある日、チャレンジショップなんで、時々会計士さんが「みんなが将来お店を出来るかなー？」って、状況を見てくれるんですよ。と、ぼくはその飲食代がハンパない（笑）

田中： そりゃ、毎晩飲み歩いてたら、ねえ（笑）

勅使河原： そう。毎晩飲んでるから、飲食代でハンパない金額を使ってるというのを見せられた時に、初めて自分で気づくんです（笑） 「俺、毎月こんなに飲んでるの？」 「これ、おかしいでしょ？」 「こんなだったら、自分で店やった方がよくね？」 って。

田中： うん（笑）

勅使河原： で、自分で始めちゃった。

田中： あははは。それがさっき言ってらした、飲食店の始まり？

..... つづく ^^



◆ファッションブランドを閉じた後は飲食店をはじめてまた大当たり

勅使河原： そう。でも飲食店を一生やる気は全然なかったですね。あ、そのきっかけも、飲食店をやろうってなり始めていった時に、ぼくがよく行っていたお店のオーナーさんが、その時引退されて、庭師をやったんですよ。

田中： へえ??

勅使河原： その人、「庭師をやってみて思った。俺はやっぱり飲食業だ」って。その方は（笑）

田中： あはははは。

勅使河原： その方としては、やっぱり人脈とか、そういう人のつながりが大事で。「そういう人たちをテシ（勅使河原さん）はたくさん持ってる。俺とタッグを組まないか」って、言われたんですね。

田中： ええ。

勅使河原： 「おまえがオーナーでいいから。一緒にやらしてくれよ」っていうのを何度も言われて。あと、そういう数字も見て。「これは飲食業やった方がいい」と。でも、ぼく、なんにも経験ないんですよ、飲食業なんて。でも、「やるわ、店」って。

田中： そのノリは（笑）

勅使河原： また当時ちょこちょこ通っていたチャレンジショップの服屋さんの近くにあった、一軒家を改装した飲み屋さんをひとりでやってる人がいたんですけど、その人の店で飲んでる時に「テシ、この店、やらん？」とか言われて。「俺さ、占いで駅の方に出た方がいいって言われたんだよね」って。

田中： 笑

勅使河原： ぼくは誰も外から見たらわかんないような、古びた民家を改装してお店にしてるっていう、そのスタイルがすごく好きで。

田中： 隠れ家的な。



勅使河原： そうそう。すごい隠れてるんですよ。もう、知る人ぞ知るみたいなの。どこ見ても見つからないし。雑誌にも載ってないっていうのが、大好きでちょこちょこ通ってたんですよ。

田中： ええ。

勅使河原： その人が「やらん？」って言うんですよ。で、「やる！やる！」って、即返事をしたんですよ。ラジオをやった時と同じなんですけど（笑）

田中： ふふふ。

勅使河原： 即返事したら、すぐ決まって。誘ってくれた人に電話して「俺、やることになった」って言ったら、いろんな心得を教えてくれるんですよ。結構具体的なものだったんですけど「メニューはどうすんだ？」「お酒はどういうのをやりたいのか？」「食事はどんなの出したいの？」って。

田中： ええ。

勅使河原： ぼくはほんと好き勝手に言ってて。ちょっとアメリカなイメージがぼくの中にあって、「それをやりたい、ここで」って。しかも、雑誌や広告行かずに、やりたいって始めて。

田中： ええ。

勅使河原： で、人がいるねって。ぼくとその人とぼくの先輩ですごくおもしろい人がいたので。その人ダンスやってた人なんですけど、「面白担当として、この人いるなー」って。あと、ぼくの後輩で顔のめちゃくちゃいい子がいて。ラップをやってる後輩だったんですね、それで「この子もいる」ってなって、メンバーを揃えて。

田中： はい。

勅使河原： ぼく、お酒の作り方も知らなかったんですけど、友達の店やってる人を呼んで、ちょっと教えてくれって。メニューも作って、デザインをすることが得意だったんで、メニュー表とか、ポストカードみたいなのは全部自分で作って。

田中： へええ。

勅使河原： 始めたら、また大ヒットしたんです。

田中：　すごいじゃないですか。

勅使河原：　大ヒットしました。たぶん、今思えば年齢とタイミング、そういう人脈がたくさん集まって来てるタイミングと。その時25歳とかなんで、みんな同級生とか、結婚するちょっと前ぐらいで、まだまだみんな遊んでる感じなので、そういう人たちが全員集合したんですよ。

田中：　うん。

勅使河原：　すごいことになって。その人たちってその地域でのキーマンみたいな感じで、お客さんを連れて来てくれることが多くて。おかげでお客さんが減ることもなく3年間やって。

田中：　ええ。

勅使河原：　半年したら最初に誘ってくれた人を、ボスとして2号店出した。2号店は1年経ったら、完全にぼくとお金の縁が切れる形にしといたんですよ。一応協力店だけど、売り上げの何パーセント納めるとか、そういうことは無しにして、「あとは好き勝手やろうぜ」っていう。で、「交流イベントみたいなのも仕掛けてやってこうぜ」って。

田中：　ええ。

勅使河原：　そこそこうまくいったんで。それから、ここ（ピッチFM）に入った。ってことでの、会社員2回目（笑）

田中：　ぶ。

勅使河原：　笑　めっちゃ長くて、すいません。ストーリーを全部話すとこういう感じになる（笑）

田中：　おもしろいー。

．．．．．　つづく　^^

◆何かを仕掛けていくことの楽しさ

勅使河原： なので、この会社ではすごく変わった人だと思われてると思うんですけど。まあ、そりゃ、そんな世界からやってきて知るわけないよなって感じなんですけど、今は7年ここにいるんで、なんとかそういう気持ちもわかってきたかなっていうふうには思っはいるんですけど（笑）

田中： あはははは。

勅使河原： ね。ていう感じなんすよ。

田中： 7年っていうと、バンド活動と同じぐらい？ それよりも長い？

勅使河原： そうですね！ それくらいやってますね。若い時の7年だったんで、今の7年とはちょっと中身の質は違うと思いますけど。でも、同じぐらいやってるので、ポジティブに考えると、経験してなかったことを経験出来てるって感じですね。

田中： ね。お店も最初から3年って、長くされないって決めてらしたし。

勅使河原： そうなんです。その頃は自分がタレントとして、昇華していく、花開いていく、というイメージだったんで、その要素を補うという計画だったんです。飲食店も全部。で、そういう業界の話題の中心にいることだなと思った上でのいろんな服やったりとか、飲み屋の仕掛けだったりしたんで。それがいつしかね、変わっちゃうんですけどね。コロッと。

田中： その変わっちゃう、きっかけとかあったんですか？

勅使河原： .....うーん。あ、やっぱり、なんかいろいろ思ったんですけど。今こうして前面に出ておきながら言うんですけど。

田中： ええ。

勅使河原： ぼく、仕掛け人が好きなんですよね。なにか、こうムーブメントを起こすとか、そういうことを仕掛けるっていうのが好きなんですよ。だから、そういうのも自然と考えが変わって、今までだったら、なにかのイベントで司会をするっていう機会があったとしたら、全部自分が欲しかったんですけど、そういうふうになんか思わなくなってきたんですね、自然に。

田中： へえ。

勅使河原： このイベントはこういう人が合うな、こういう人が言ったらウケるよなとか、っていうことを考えるようになってて。

田中： うん。

勅使河原： プロデュース業じゃないですけど、そっちの方がむいてるなってふと感じた時があったんですね。ぼくは、ぼくに来てほしいと言われるところ以外は、今行ってないですけど。確かにいっぱいお話は来るんですけど、なんかこうお客さん側の視点でみて、これだったら楽しいなとかって、あるじゃないですか。

田中： ええ。

勅使河原： 正直な意見で考えて「誰でもいいけど、うまい司会者に来てほしい」みたいな感じなら、「若くてきれいな女の子が行くと、さらに楽しいだろう」とか。そうすると「おおっ！」って向こうの人もテンション上がるだろうなとか。

田中： うん。

勅使河原： 別に若くもないおっさんみたいな感じで来ても。「まあ、うまくやってくれりゃいいや」ぐらいだと思うんですよ、多分司会とかそういうのも。でも、そこでなにかひとつ引かかるポイントが作れば、またそこに頼みたいなってなるじゃないですか。

田中： うん。次につながるような。

勅使河原： そっちの方が大事だなと思ったんです。だから、ワンショットを自分が出たがりってことで全部とっちゃうんじゃないかと、「これ、俺じゃないでしょ」というのを、いつも思うようになったんですね。

田中： そうかぁ。

勅使河原： 最初は名指しですっと来てたんです。バンドでテレビにも出てるし、ラジオにも出てるっていうのが、ぼくしかいなかったんで。そういう意味で、ぼくのことを第三者の人がよく知ってるだろうというイベント側の人から呼んでくれるというのが多かったんですけど。今はそれもすすんでいろんな人が出てるんですよ。テレビに出たり、ラジオと両方やったりしてるので、条件は変わらないんですけど、そうやってみた時に、こういう時はこういう人じゃないかなって凄く考えるんですね。

田中： ええ。

勅使河原： なんか、ペアって盛り上げてほしいのか、しっかり進行してほしいのかってあるじゃないですか。そのすべてを受けとめられるピッチFMみたいなのを作りたいなって思っちゃてるんですよね、今。

田中： へええ。

勅使河原： それこそね、「CBCのつボイノリオさんが来ます」ってなると、おじさん、おばさんたちが「つボイノリオ、来るらしいよ」って。それくらいのパンチ力があるような。「誰かピッチの人が来るらしいよ」じゃなくて、その人の本領を発揮して「あの人、よかった」ってなってくれるようにしていきたいなって。

田中： スターを育てる、みたいな。

勅使河原： スターを育てるなんて、偉そうなことは言えないですけど、全部アタリにしたい。

田中： うんうん。

勅使河原： チョコレート食べたら「全部、アタリ！」みたいな（笑） そういうことをやっていきたいんですよね。そうなんです。だからぼく、誰がどこをしゃべるのかを決める方もやるようになっちゃってるんで。

田中： ええ。

勅使河原： こういうことをしてるんで、こんなとこ出てちゃいけないんですけど、ほんとは（笑） そういう楽しみを見ながら。みんなすごく頑張ってるんですよね、いろんな方面で。

田中： ええ。

勅使河原： 話が飛び飛びになっちゃってるんですけど。パーソナリティのくせにしゃべりが下手だと思われちゃうと、アレなんですけど。思いつきでしゃべってるんで（笑）

田中： いえ、全然です（笑）

..... つづく ^^

◆ヒップホップ出身だからこそ地元を愛する

勅使河原： なんか総じて、ある日突然気づいたキーワードのひとつとしては……。

田中： うん。

勅使河原： 地元が好きなんですよね。この地域が好きみたいなの。

田中： 知立にお住まいだったんですよね。

勅使河原： 最初、知立。子供の頃は安城にも住んでいて、知立に引っ越し、今刈谷に住んでるんですけど。その間に1回結婚して1回お別れして、もう1回結婚したっていうね。感じなんですけど。そういういろんなことがありながら、思ったことは、地元が好きなんだよねと。

田中： ええ。

勅使河原： これが、どこか違う地域に持ってってやってみようとかは、全然興味がないんですよね。この辺りの、西三河、碧海5市というこの辺の地元が大好きなんだな俺っていうのを感じましたね。だから、ここにいるんでしょうね。

田中： バンドとかで売れてきたりすると「おら、東京行くぞ」とかって、結構ありそうじゃないですか。

勅使河原： あー。あるある。そういうの、よくありますよね。

田中： ね。でも、愛知、岐阜、三重とか辺りからの活動だったわけじゃないですか。

勅使河原： そうなんですよ。なんか、これは……。影響を受けた音楽ジャンルが、ヒップホップというところが、大きく関わっていて。

田中： え？ どんないふうに？

勅使河原： ヒップホップっていう音楽はですね、みんな自分の地元の「おらが代表だ」っていうのが前面に出てくる音楽なんですよ。アメリカでも、なんでも。

田中： えー？ そうなんですか？

勅使河原： そう。だからアメリカのカリフォルニア州に住んでる人は、「西海岸の俺だぜ」って歌を出すし。

田中： おー。

勅使河原： ニューヨークの人は「イーストコーストの代表は俺だ」って。

田中： え？ じゃあ、地元代表のラッパーみたいな感じ？

勅使河原： もう、全員がそう！ そのムーブメントとしては。誰もがそうです。

田中： へええ。

勅使河原： ビヨンセの旦那さんのジェイ・Zは東海岸、イーストコーストの。エミネムとかは西海岸の音楽の人。みんなそれぞれが、そのイメージ、看板と共に活動してるんです。

田中： そうなんだあー。

勅使河原： そう。だから「ニューヨーク♪」って歌うのは、ジェイ・Zだし。「L.Aー！」っていうのはエミネムだし。

田中： あははは。

勅使河原： そういう世界なんです、昔から。その土地のスタイルがあるっていうのがカッコいい、みたいな感じなんです。で、東と西だけじゃなくて南の方に行くと、「音的にはこんな感じの音が流行ってて」 それこそ、全体の文化なんですね。車のカスタムとか、ファッションとかも皆違うんですよ、それぞれに。

田中： うん。

勅使河原： っていうのが、それが大好き少年たちが大人になったんで、日本にもそういうことにも出てくるんですよ。だから「名古屋だと、だれ」とかっていうのを言うんですよ、ヒップホップの世界では。「北海道は、だれ」とか。

田中： 地域性が、すごい強みなんですね。

勅使河原： そうそう。「東京は○」「横浜は○だ」みたいなものになってるんです。ヒップホ



ップとかレゲエとか特にそういうのが強くて。

田中： うん。

勅使河原： 音楽文化の中でそれがすり込まれたというか。……ってことなんですよ。だから地元発みたいなことを、みんなやりたがる。全体的に。そういうのが一堂に会してイベントをやったりするんですけど。

田中： ええ。

勅使河原： そういう、なんていうんですかね、そういう文化の中にどっぷり浸っていた名残りだと思うんですね。でも、今そういう活動やってないですけど、やめた後にもその感覚が残ってるというか。

田中： 笑

勅使河原： 最初に影響受けたのはね、そういう感じなんですよ。プロモーションビデオとか見るじゃないですか。CD買ってきたり。「今年の東海岸の流行りは、こんな音だね」とか。全世界の流れになるんですよ、その音楽文化の中では。一般的には知られてないけど、見たら普通にわかるんですよ。そういうこと、書いてあるんで。一步のめり込む人たちは、みんなわかるんですよ。たぶん、それにね、影響受けたんでしょうね。

田中： そうなんですねー。

勅使河原： そうなんですよ。

田中： きっかけはなんだったんですか？ ヒップホップへの。

勅使河原： ヒップホップ。ヒップホップになってちゃいますね、やっぱり（笑）

田中： だって、原点じゃないですか（笑）

勅使河原： そうなんです。ある日ですね、小学生の時に学校行く前にテレビをつけたんです。その当時、SMAPが朝、番組やってたんですよ。

田中： うん。

勅使河原： ぼく、そもそも、なんかわからないけど洋楽が好きで。ピッてテレビつけた時に、「12歳のラッパーがアメリカで大ヒット」みたいなPVが、SMAPの番組で出たんですよ。ぼく、そういうの大好きでね。夜中にやってた音楽番組もビデオに録画して、何回も見るとな子供だったんで。そのテレビ見たら、とんでもない恰好をして、少年ふたりが出てきて。

田中： ちなみに、どんな格好してたんですか？

勅使河原： そのとんでもないがすごくて。ジーパンとかベースボールシャツとかを全部反対に着てるんです。後ろ前を反対に。めちゃくちゃインパクトあって。あと、自分と同年かそこから、このポジションにいるっていうのが。

田中： ぶ。

勅使河原： 「え？おまえらはデビューしちゃって？」「PVなんかも作っちゃって……？」とかっていうのが、カチンと来たんです。

田中： ぶはっ。カチンと（笑）

勅使河原： カチンと来たんです。「あれ？」「ヤバイ」と思って。そしたらそのグループの事が、一瞬で忘れられなくなっちゃって。『クリスクロス』っていうんですけど、それをパッとメモって。

田中： うん。

勅使河原： 別にその時そんなふうには見てないですよ（笑）パッとみて自分の心の中で、そういうものが「わー」となって。小学校6年なんで自転車でいける、その時知立のショップに行ったら売ってないんですよ、そんなの。で、店員さんに聞くんですよ「クリスクロス、ないですか？」って。そしたら「は??」っていう感じなんです。これはダメだと思って電車に乗ってパルコまで行って。

田中： 栄まで出たんだ（笑）

勅使河原： タワーレコードに行って。もう結構な冒険ですよ、小学生にしては。タワーレコードに行ったらクリスクロスあるんですよ。「キター！」ってなって、お小遣いはたいて買って、そこからいつも聴いてたんですけど。そっか、そういう影響が、すごく、ありますね。……で、なんか悪そうなんですよ。

田中： うん？

勅使河原： なんていうか、世の中でいう『ぐれる』って言葉があるじゃないですか。ぼく、ぐれるっていうのは、その当時の『ビーバップハイスクール』とか、ああいうイメージで。髪の毛染まったり、パンチパーマやそり込み入ってる、当時高校生とかの、そういう悪い人みたいなイメージなんですけど、それを子供心に「めちゃくちゃだせえ」って思ってたんですね。

田中： うん（笑）

勅使河原： で、「俺、こんな奴にはなりたくない」と。しかも「あんな奴らになめられたくない」「負けたくない」みたいなのがあって。なんかわからないけど、そういう精神があって。

田中： 負けず嫌い（笑）

勅使河原： すごく負けず嫌いだったんですけど。で、それに負けたくないと思いつつ。同級生でもちょっと不良に興味がある子は、そういう色に染まって行くんですけど。

田中： うん。

勅使河原： その子達はそうなる、自分たちの天下みたいになっちゃうんですね、小学生の間でも。でも、ぼくはその当時、たいして大きかったわけじゃないですけど、身体能力的にはそういう子達を上回っていたので、そんな子達にいじめられるわけにはいかないし。そういうふうじゃない逆サイドになりたいなと思ってたんです。もう真逆に。そんな子達も口出しできないぐらいの。

田中： ええ。

勅使河原： そんなに細かく考えてたわけではないんですけど、とにかく「ビーバップみたいな、ああいうのにはなりたくない」って思いが強かった。

田中： カッコよくて、一目置かれる、みたいな。

勅使河原： そう。カッコよく……でありたかったんですね。なので、誰もやってない、後ろ前反対を、その後やりだすんですけどね（笑）その後、知立市でやり出して。中学校1年とかで、休みになるとお小遣いで買ったベースボールシャツを逆に着て、自転車乗って、みたいな。そしたら、1こ年上の子達とかでダンスが好きな子とかがいて、一緒に遊ぶようになって。

田中： うん。

勅使河原： 応援で一緒にダンスしたりするようになるんですね。その頃は、『たけしの元気が出るテレビ』でダンス甲子園が始まった頃で、それにすごく影響されて、路上でダンスの練習とかするようになったんですね。公園に集まったりとか。

田中： へえ。

勅使河原： そうですね。そっからは、ダンスと音楽にのめり込んで行ったっていう感じですね。で、「高校になったらダンス甲子園に絶対出るぞ」と思っていたんですけど、高校生になったら企画が終わったんですよ。

田中： せっかく練習してたのに。

勅使河原： 全部ビデオとかも買ったりとか、大好きで、ダンスもめちゃくちゃやってたんで、そこそこ踊れる感じになってたんですね。終わって、ショックで。行き場をなくし（笑）

田中： うん（笑）

勅使河原： 中学校の時のダンスやってた先輩が、高校生になってパーティを開くようになるんですね。高校生で、あんまりよろしくないですけど、その当時飲食店を借りてDJ頼んで、パーティ開くと、すごい人が来る。夜遊びムーブメントが巻き起こってたんですけど、そこにダンスショーをする人として、出ることになったんです。

田中： ええ。

勅使河原： で、行った時に、なんと中学の時の先輩たちが、他の知らない子達もまぜてラップしてたんですね。ぼくは当時ラップって『スチャダラパー』ぐらいしか知らなくて、アメリカのラップはすごく好きだったけど、日本では無理だなんて。「スチャダラパーみたいにかわいいラップになっちゃうな」「それだとやだしな」って。でも、その人たちがやってたラップはカッコよくて、「あれ？」みたいな。「なんだ？ ちょっとこのワルそうな感じと、かっこいい感じはなんだ？」って。

田中： 笑

勅使河原： で、ダンスばかりだったのが、そういう日本語のかっこいいラップが詰まった、当時はカセットテープで、DJいろんな曲つなげて作ってくミックステープっていうのがあって

。それを先輩からもらって、それを聴いて。それに入ってるのは、スチャダラパーと全然違って、結構カッコいい路線。それにめっちゃ影響を受けて、ラップ始める高校生みたいなことになり。さっき話した話につながっていくという（笑）

田中： うーん（笑）

勅使河原： なんか、そういう小さい頃からの体験とか、その時興味を持ったものを、持ったまま大人になっちゃった感じですね。だから、ぼく純粹なんですよ（笑） 一途。

田中： うん、うん（笑） 好奇心の赴くままに。

勅使河原： そう。ズバッと興味を持ったら、ずっと好きなんですよ。なんでもそうなんです。こうして話してて、今思えば。香水とかすっげー流行った時があって、それも高校生ぐらいだったんですけど。その当時一番のお気に入りのを見つけたんですけど、それを普段はつけないんですけど、今も使ってるんですよ。

田中： あー。

勅使河原： この間ここで、ホームメイド家族と収録した時は、メンバーのみんな「あれ、テシ、匂いも変わんねーな」っていうぐらい、トレードマークとしていた、みたいな（笑） そういえば、いろいろそうですね。一途ですね。

田中： うん。

勅使河原： あー、今思った。ぼくは結構一途なタイプだなんていうことを思いましたね。

田中： ね。

勅使河原： こんなことばっか、しゃべってていいんですか？

田中： 全然いっすよ。すごくおもしろいです（笑）

..... つづく ^^

◆結婚、離婚、結婚

勅使河原： なんか、おもしろい人生を歩いて来てるとは、思ってるんですけど。プライベート生活とかに入っていくと、いろいろあるんですけどね、さらに。

田中： シャベってもらって、いいですよ（笑）

勅使河原： これ、シャベってもねー。あんまり、あれですよ。

田中： あんまりよろしくない？（笑）

勅使河原： はい、結構壮絶な、壮絶とか言っちゃいかんな。

田中： ふうん。

勅使河原： ね、まあ。なぜか、なぜか1回結婚に失敗し、みたいなの。失敗したとは思ってないんですけどね。

田中： うん。まあ、ああいったものはご縁ですしね。

勅使河原： はい。見た目がめちゃタイプの子と結婚したら、失敗したという。

田中： ふふふふ。

勅使河原： っていうことだけは、おもしろ話として言えるんですけど（笑）

田中： 私の知り合いの方も、2回目のご結婚されたんですけど。恋愛と結婚は違うというようなことをおっしゃってて。

勅使河原： なるほどね。なるほど、なるほど。それはまた深いお話を。

田中： 好きだから一緒にいるわけであって、そこで「私のこと好き？」とか聞かれるのは「ちゃうやん」と。「それ確認することじゃないよね」みたいな。

勅使河原： なるほど、なるほど（笑）

田中： だから「今のパートナーは、自分のポテンシャルって部分を見てくれて一緒になった人

だから、すごく居心地がいい」と。

勅使河原： うーん、わかる気もします。

田中： 確認する愛ではない、みたいなね。

勅使河原： そうですね、なんかこう、思いましたね、そういうの。結婚っていうかパーティーっていいのかわかりませんが、「すげーどっちかが頑張ってる、無理してあわせようっていうのは、結局あわねーな」って。

田中： なるほど。

勅使河原： なんか気づいたら、自然と歩幅があってるというか。

田中： うんうん。

勅使河原： テンポが、リズムが。気づいたら、なんも「せーの」ってやってないのに、あってる、みたいなのが、やっぱりいいんだなって、今感じてますけど。

田中： まさしく。

勅使河原： 極端に言えば、好みの音楽が全く違ったとかというのが、前回。向こうはパンクロックで、ぼくはヒップホップ。

田中： んふふふ。

勅使河原： もう、全然違うでしょ？ で、全然合わなかったんですけど（笑）

田中： のれないー（笑）

勅使河原： で、今の奥さんは、そもそもレゲエとかブラックミュージックが好きだったんで。ジャンルは違えど、テンポがあうというか。

田中： ベースで流れてるテンポは同じような。

勅使河原： そう。まあ、そんなに音楽が中心にはいないですけど（笑） そんな、感じですね。「勝手に合っちゃうな」みたいな。

田中： それはあるかもしれないですね。

勅使河原： そうですよねぇ。といういろんな経験を。そんな話をしていたら、ちょっと汗をかいてきたんで。

田中： ふふふふ。

勅使河原： ふうっ。

田中： おもしろいですね。

勅使河原： おもしろい話はいっぱいできると思うんですけどね。誰かのためになる話は出来な  
いんですけど。

田中： もう、全然（笑） なんかね、そういう破天荒な。

勅使河原： そう、結構、破天荒なんです。今は会社員なんですけど。だからすごく周りはびっ  
くりしてるんですよ、この状況。

田中： だって、路線として全然違うじゃないですか。

..... つづく ^^



◆好きなことをずっとやってきただけ

勅使河原： そうなんです。けど、みんなはそう言うんですけど、自分の中ではあんまり、自分の好きなことをずっとやってるだけなんです。ね。

田中： うーん。

勅使河原： そもそも興味を持つポイントっていうのは、ぶれてないと思うんですよ。だから、周りから見ると全然違うのに、自分はその意識はないっていう。好きなことをやっている。

田中： うん。

勅使河原： あー、やらせてもらえるようなところに今いるんで、いいのかなって思いますけど。この会社の中でも部署が違ったりすると、全然違うんでしょうね。自分の思いっていうか。今だと、なんでも作りだせるところにいるんですよ。それが、世の中のいろんな人に影響を与えたりとか、なにかを巻き起こそうと思った時には結構なパワーを持ってるっていうか。

田中： ええ。

勅使河原： だからこそ、メディアは中立でなきゃいけないとか、あるとは思いますが、そういうところにいるんで。そもそもが「そういうことがずっと好きで、やってきただけです」っていうので、一言で終わっちゃうんですけど。

田中： 小さい時から、明確な感じですよ。

勅使河原： で、今振り返ると、そう思うんですけど。本人は適当、だと思ってたんです、ずっと。ある程度大人になって、この会社員生活がある程度続いた頃に、そういうことを感じたんですね。意外と思いは変わらないっていうか。それまで気づかされないっていうか。

田中： たしかにね、出来事の渦中に入ってる時って、周り見えてないですもんね。

勅使河原： 全然見えてないですよ。それこそお仕事も自分でやってた時代が長かったの。

田中： ええ。

勅使河原： 自分が代表じゃないですか。自分の行く先に、みんながついてくるっていうシステムじゃないですか。その舵取りを間違えると大変なことになったろうなって思ったんですけど。

、たまたまそういうのが、うまく行ってたんだなって。あとから思うと。

田中： ええ。

勅使河原： でもその当時は「おれ、次こんな感じがする」みたいな漠然としたことを、みんなに言ってたんですね。

田中： それ、浮かんでくるんですか？

勅使河原： なんか、そうです。なんか興味が湧くんです、そこに。なんだろうな、「次はこういう動きで行くぜ」っていうのが、いきなり閃いちゃうというのか。

田中： うん。

勅使河原： いろんな見てきたものの影響を受けてるっていうこともあると思うんですけど。あるパッケージ見て「これと同じようなパッケージ作ればいいんだ」じゃなくて、「次はピンク色のパッケージのような気がするな」みたいな。

田中： うーん。

勅使河原： 「しばらく、ピンク押しで行かない？」みたいな風でみんなに言うとか。全部思いつきで来てたような、気がするんですよ。それを冗談で、最近モデルさんとか使ってるんですけど『バイブス』（笑）「バイブス的には、こっちだな」ってことをみんなに言ってるんです（笑）これ、みんなには通じるんです。

田中： うんうん（笑）

勅使河原： 「バイブス、上げてきましょうか（笑）」って話になりながら、「よし、これで行こう」って。みんな世代も近かったんで。なんか、空気を読んでいたのか、機を見ていたという意識もなく、でもなんとなく負けず嫌いなのと、あとはそれこそほんとに仕掛け人になりたいみたいな、そういうムーブメントの。

田中： そうですねえ。バンドを売り出していくときの戦略とかなんていうのは。

勅使河原： そうですね。ぼくも前面に立ってマイク持ってたアーティストでしたけど。その時プロデューサーみたいな感じで、そこにいればもっと続いたんだらうなって思いますがね（笑）ある日、突然。大人になる前は、キャパが決まってるじゃないですか、やれることが

。そのキャパが溢れそうになると、いろんなところが疎かになっちゃうんで。

田中： うーん。

勅使河原： 今だったら同じことやっても、もっと効率よくやれると思うんですけど。その当時はそれだけの事しか出来ない。歌作りながら歌って、営業活動って、なかなかむつかしかったんで。CD置きに行っても集金に行けないとかね。そういうのもなかなかあったりするんですよ。

田中： 笑

勅使河原： バランスが、なかなか取りづらかったです。今ならうまくいけるだろうなとは思いますがね。

田中： そうですね。若い故に勢いがあるんだけど、無駄に使ってしまう部分も多かったりするんでしょうね。

勅使河原： そうそう。無駄は多かったですね、それこそ。情熱の世界にいたんで。「これ、無駄じゃね？」って禁句のような感じですね。みんなが熱くなってる時って。「じゃあさ、あと5分で終わろう」とか、やっぱり言えない。

田中： 頭はかすめたりするんですか？

勅使河原： かすめないっす。

田中： かすめないですよ（笑）

勅使河原： その時はかすめないです。そういえば「無駄に何時間も同じこと考えてたなー」とか（笑）考えても考えても結果変わらないのに。「これぐらい考えたら、こうしよう」って、決断力がないのかわかんないですけど、同じこと考えてたなって。なんでしょうね。

田中： うん。

勅使河原： 総じてラッキーだったなって感じですけどね、全部。全部うまい方向に行ってるんで。どっかで転んでたりとか、大失敗だったりとかってことは、そこではなかったの。なので、結婚で大失敗しちゃったんですけどね、みたいな。

田中： ぶはっ。大失敗だったんですか？（笑）

勅使河原 大失敗っていうかねえ、ほんとうまくいかないというか。なんか「こういうふうになっちゃうのか」っていう。すげー変な言い方すると。「この子をどうにかしてあげたい」みたいな気持ちが強くて、一緒になったんですけど。

田中： ええ。

勅使河原： 基準がそもそも違って。なにをしても上から目線ってみられちゃうし、気を使ってもそうだし。

田中： かみあわないんですね。

勅使河原： 全部がかみあわなかったですね。で、他は全部うまく行ってるから。だから初めて、すごく苦しんだというか。悩んだというか。

田中： うん。

勅使河原： そういうのは、そこしかないですね。他は全部「あれを目指そうぜ」でたどり着くみたいな。「よし、次はこうだ」「おー」って登ってくみたいなんですけど。それは、だいぶ、壁にぶち当たったというか。

田中： ええ。

勅使河原： すべてにおいて自信满满なのに、ことごとく砕かれたというのか、その部分では。通用しないっていうか。ある意味、いい経験をさせてもらったと思うんですけど。ほんとその部分だけですね、壁にぶち当たって……ほんとに悩んじゃう、落ち込むっていうのは。

田中： うん。

勅使河原： あとはポジティブシンキングなんで、うまいこと変換させてたりするんですよ、自分に。それは悪いところもあると思いますが、大きく見れば「そういう考え方はいいな」って未だにそうなんですけど。それが通用しない、歯が立たないっていうか。

田中： そこでなにか気づいた事ってあるんですか？

..... つづく ^^

◆ 1回止まって考えよう

勅使河原： 気づいた事はねえ、やっぱりね、なんて表現したらいいんでしょうね。「なんか、1回、考えるってことは大事だぞ」っていうこと。

田中： ぷはっ。

勅使河原： 思いましたね（笑） 考えてるんですけど、自信の方が強すぎて、多少の波が立っても「俺の船は突進していくぜ」っていう勢いの方が強くかったんですけど。突進する前に、「俺の船は強いんだけど、波が立った時になるべく被害を最小限に抑えられるか」というか。そういうことを考えたことがなかったんですよ。

田中： うん。

勅使河原： 「いろんなことを考えないといけないな」っていうことは思いましたね。これ、漠然としすぎてて、適当発言みたいなんですけど（笑）

田中： いえいえ、全然。なんか、吟味するみたいな感じですかね？

勅使河原： 1回考える。

田中： 状況判断みたいななの？

勅使河原： そう。1回考えるっていうのを何事にもした方がいいなっていうのを思いましたね。この会社の中では「そんなこと、してねーだろー」って言われるかもしれないですけど、自分なりには一旦考えてる。

田中： ええ。

勅使河原： でも、「これって、どうかな？」っていう逆説を唱える部分もあって。

田中： わかる気がする。だって、スタートダッシュに関わるじゃないですか。

勅使河原： そうです、そうです。

田中： ね、少しでも、一歩でも早い方が有利だったりするから。そこで「ちょっと周り見よう」ってことになる、半歩は遅くなる。

勅使河原： 半歩遅く。そうなんすね。だから、それをずっとやらずに、走るだけ走って来たんですけど。結構痛い目みると。打撃が大きかったんで、そこから、変な意味、慎重になったというか。そういうパターンになってますね。

田中： うん。

勅使河原： でも、それを客観的に見ると「会社員としては、それ正解！」ってなるんですよ（笑）

田中： ふふ。必要なアイテム、みたいな（笑）

勅使河原： 必要なアイテム（笑） 半々でいるんですけどね。いろんな自分が。細かい話をするとたぶん1週間ぐらい話せるぐらいの。

田中： ネタが（笑）

勅使河原： ネタがあるんですけど。1回だけ、ぶち当たったって感じですね。

田中： かなり大きそうですね。

勅使河原： そうそう。かなり大きかったですね、自分としても。「二度と結婚なんかするか」って思ってたんですけど、なぜか2回目の結婚しちゃいましたね。

田中： うふふふふ。

勅使河原： 「1回目の失敗を忘れたな」って言われたりするんですけど、そうではないと思ってるんで。

田中： 「それがあって、今」って感じですね。

勅使河原： そうなんですよねぇ。だからみんな「失敗をのりこえて大きくなっていく」って言われるじゃないですか。

田中： ええ。

勅使河原： 「失敗したっていいんだよ」「失敗をのりこえた時に人は大きくなるんだよ」って

言われるんですけど。また「同じことを経験しろ」って言われたら、「ご遠慮させていただきたい」って感じですけど（笑）

田中： たしかにねー。

勅使河原： 汗かきながら、話してますけど。冬なのに。

田中： ふふふふ。おもしろいです。

勅使河原： 「こんなことしゃべってよかったのか？」って思いながらしゃべってるんですけど。なかなかこういう話って、あんまり人にはしないんで（笑） おしゃべりタイムなんで、バンバンしゃべっちゃってるんですけど。

田中： うれしいです。普通の、X=Y的なお話はどこいってもあるんで。

勅使河原： まあ、ですね。流れが読めちゃう話。

田中： そうです。それだったらやる意味ないんです。

勅使河原： なるほど。

田中： だから『ハタラクヒト\*ペディア』という括りで、ハタラクというか、いろんなはたらき方、お仕事をご紹介するって部分もあるんですけど、ヒトにも焦点があたってますから。

勅使河原： お仕事、全然紹介してないですよ（笑）ラジオのお仕事って……というお話をしなくちゃいけないのに。

田中： あっはははは。全然。テシさん、おもしろいです。ちゃんと流れ的にもDJのお仕事に就かれるまでのお話もして下さってるし。テシさんがDJのお仕事されてる時に2回ほど放送でお邪魔したんですけど、質問とかの投げかけ方や、フォローであったりがほんとすごくお上手で、さすがーって。

..... つづく ^^



◆人が好きな人にこそDJは向いている

勅使河原： あー。それって意外と難しいみたいなんですよ。みんなラジオやりたくて来る人たちも、最初は出来ませんね。自分がしゃべることに精いっぱい、人のフォローだったり、なにが飛び出すかわかんないっていうのが、苦手なんです。

田中： あー。

勅使河原： ピッチは結構ベテランな人がいるんで、出来る人が多いんですけど。最初はそういうの出来ませんよね。そうすると、1回ご出演頂いたようなコーナーも、完全原稿みたいになる。もう事前にやりとりして、それをそのまましゃべってってなる。それでたまに「へえー」とかっていうのを入れると、普通にしゃべりあってるような感じになるじゃないですか。

田中： うん。私の友人が、放送作家をしてるんですけど、「ここで合いの手入れる」とか結構細かく書くようなことを言ったり……。

勅使河原： 結構細かいと思います。「ここで、笑うとか」って原稿作っとくとか。そういう人もいますが、それが自然に出来る人も割といますね。あれはなんでしょね。人が好きな人は得意なんです。

田中： そうなんですか。

勅使河原： うん。興味持って見て、話すじゃないですか。だから普通の会話として成り立ってしゃべっていくんですよね。手元に大事なポイントだけ箇条書きにしておいて、ある程度楽しくしゃべって。「次ここ行って」って流していくんで、すごく上手い展開になってくんですけど。

田中： ええ。

勅使河原： 他人に興味のある人は結構得意だと思います。たまにいますよね、全然人に興味のない人も。

田中： いますねー。

勅使河原： ゲストが来てトークコーナーがあって、「私、大丈夫だった？」って言葉が一番最初に出る人とかがいる。それを外側の人は「(私の)進行具合は大丈夫だったか？」という確認

って捉えるんですけど、ほんとは違ったりするんですよ。

田中： ん？

勅使河原： つまり、写真でいうと「私かわいく撮れてた？」みたいな。そういうのが出る人もいます。と、びっくりしますよね（笑） 「そこー？」ってなりますよね（笑） やっぱり、続く人は、似てるかな、タイプが。

田中： うん。

勅使河原： やっぱり人が好きっていう人が多いですね。だから接客業も出来ると思うし。「やったら、そこそこじゃないの」って思うし。全然知らない人が来ても楽しませるっていうぐらいのだべりがみんな出来るんじゃないかな。

田中： すばらしいですよ。

勅使河原： 逆にその世界にいる人たちがくると、すごいんですよ。接客や人と接したりってことが、そもそも出来る人だから、あとは決まり事をマスターするだけなんで、ラジオのDJにはなりやすいと思うんですけど。

田中： ええ。

勅使河原： でも職業としては大変というのか。まあ、いろんな道を経て来てますね、みんな。ちゃんと、そういう学校を出て、その上にあるタレント事務所に所属してお仕事やってる人もいれば、専門学校出て誰かについて、とか。

田中： へえー、そうなんですか。

勅使河原： DJになる人って、どうやってなればいいのかって聞かれるんですけど、ぼくは。

田中： テシさん、全然違う方から、いらしてるし（笑）

勅使河原： ぼくはバイブスとしか、言いようがないですね（笑）

田中： だって、CDもそうじゃないですか、違う流通ルートで。

勅使河原： そうなんです。そうやって聞かれるんですけど。ピッチFMは、コミュニティFM

っていうんですけども、地域のラジオ局なんで、それこそこの地域の人で、なろうという人がいれば、まずは「ピッチFMの門を叩いてほしい」みたいな感じですね。

田中： へええ。

勅使河原： 学校いっぱいあるんですけど、ラジオのDJになるようなことを教えてくれるところはないんで。

田中： なにを求められるんですか？

勅使河原： この職業ですか？

田中： ええ。

勅使河原： この職業はですね。ラジオってテレビと違うんですよね。テレビって1対多。ラジオの世界は意外と、1対1な感じだと思ってるんです、ぼくは。ぼくもラジオの仕事がしくて、ずーっと勉強してきたわけじゃないんで、これまた感覚的な話なんですけど。

田中： うん。

勅使河原： ラジオを聴くって、みんなで聴こうっていうのって、なかなかないし、移動中の車で聴いたとかで。だから「みなさん」っていうより「あなたのこういうところを教えてください」というものだと思うんですよ。

田中： たしかに。

勅使河原： 「多くの方が応募してくれるのを待ってます」というのがテレビなら、「今これがピンときたあなた、応募してくださいね。メモの用意はいいですか」というのがラジオな感じがするんで。

田中： ええ。

勅使河原： テレビより、しゃべるのが難しいですね。基本独り言なんで。ひとりでしゃべるのに、誰かとしゃべってるみたいなふうにしゃべるんですよね。で、明るい人が向いてますね（笑）

田中： あはははは。

勅使河原：ほんとに気持ちが明るい人っていうのか。いわゆる友達同士の中でも、ムードメーカーになる人とか、「同級生みんなで飲み会だー」って時に、ひとりだけ変な帽子をかぶってくる奴だとか、「イエーイ」って来れるような気質の人が向いてるのかなって、気がするんですよ。

田中：あの、昔の声優さんって、みなさん役者さんなんですよ。

勅使河原：あ、そうですよね。

田中：だから、テレビとか舞台とかで直接身体を使って表現するっていうものよりは、声だけですべてを伝えないといけないって、求められるものがとても高いというか。

勅使河原：そうですね。

田中：情報が、声だけってなっちゃうから。

勅使河原：そこが限定されちゃうからね、1個のものを紹介するっていうのも大変なんですよ。

「はい、こちらが新しいキット○ットです」っていうのと、「新しいキット○ットは、△なパッケージで、ちょっと大人な雰囲気が出てるというか」みたいな。見えない人たちに伝えるわけじゃないですか。

田中：ええ。

勅使河原：最近になってやっとなんですけど、ラジオって、人に想像をさせるメディアだと思って思うんで。ラジオなのにグルメレポートやったりとかするんですけど。やっぱりね、人に想像させるっていう能力は、ほんと限られたジャンルの人が持っているものなのかなって感じてしまうぐらい、普通の人がパッとやったら出来ないんですよ。

田中：うん。

勅使河原：テレビは出来ると思うんですよ。「おいしい」って言えたらとりあえずOKみたいななどことがあるんですよ。その「おいしい」一言勝負でも、ラジオの「おいしい」は違うんですよ。

田中：うーん。

勅使河原： こう、ズルズルって音と「んー♥」みたいなものがあったりとか、そういうの全部が混ざっての「おいしい」なわけです。一言ずつだったとしても、なんか違うというか。ぼくは「ラジオの方がおいしさが伝わるんじゃないかな」って。みんなの記憶にある、おいしいものに結びついたり、「これ、絶対おいしい」ってイメージするものって、その人が持ってる最高のものじゃないですか。それを。

田中： そこにアクセスできれば。

勅使河原： そう！ そうなんですよ！ テレビだと画が出ちゃうから見た目から、「あの辺のやつだ」という目の情報があるんで、ラジオの想像させるってところはすごい魅力的なんですよ。「これがなくなったら、さみしいな」って感じです、最近。

田中： 自分の好きな本だとか、漫画とかが映画化されたりすると、がっかりするとか。

勅使河原： あっ、わかります。

田中： それと同じ感じする。

勅使河原： 同じですね。

田中： 自分の中にあるイメージと違うみたいな。

勅使河原： 本とかの活字の中で、自分が読んで勝手にイメージしてくわけじゃないですか。それと似てるところあるかな。

田中： だから視覚情報とか、映画とかになってしまうと作った人の主観になってしまう。

勅使河原： うんうん。そうなんですよね。

田中： だけど本とかだと、その人の記憶に結びついた独自のものが出来ているんですよ。

勅使河原： そうですね。「こんな大草原があって」と言ったって、みんな思い浮かべる大草原、違いますもんね。そういう、想像することって、すごいことだなんて思うんで。

田中： うん。

勅使河原： 想像したり、妄想したりってするじゃないですか、人間は。それがすごいから。

田中： それがなかったら、人間じゃない。

勅使河原： そこに行けるってというのは、ラジオでしゃべってる人間の特権と言うか。そういう気もするので、更にこのお仕事を好きになるというか。

田中： あの、すごく奥深い感じがするんですよ。さっきおっしゃった視覚情報。テレビで「おいしー」ってなってしまうと、「あー、おいしいのね」みたいな、この枠から出ないんだけど。

勅使河原： そう！ この位置が決まってるもんね。

田中： うん。だけど、少ない情報の中でその人の中にある「おいしい」って記憶に、そこにアクセスできるってことは、その人にとってすごく特別な感じがするんですよ。

勅使河原： そうなんですよね。「最高においしいものを食べさせてやるぜ」ってことが出来るってことなんで。

田中： うん。

勅使河原： 「そういうとこ、上手く使っていかなきゃな」って思いもあるんですよ、今ね。「全体をどうするか」って試している中で。想像させる、想像してもらうというメディアなので。

田中： 発信する情報源が少ない分だけ、出すものが濃縮されて。だから逆にわかってないよ  
うで、人間ってすごいたくさんの情報を一度に得てるんですね。

勅使河原： あー、そうですね。

田中： 「なんとなく」という感覚が、研ぎ澄まされる場所っていうのかな。だから何気なく発した言葉で、その人が普段考えてることだったり、それに対する印象とかをニュアンスで感じ取っちゃうっていうのがあると思うんです。

勅使河原： あります、あります。

田中： テレビとかだと、来てる服や色、しゃべり方とかを統制することで、ある程度確立したイメージとして押し出すことが出来るんだけど、逆にラジオは隠せない部分じゃないかなって。

勅使河原： はい。隠せない部分です。逆にそこで自分をセルフプロデュースして、演出して自分の出したいイメージを、このラジオの世界で出し続けることが出来る人って、すごい人だと思います。

ちょっとぶれたら、人によってはぶれ先が違うじゃないですか。

田中： うん。

勅使河原： 単純な言い方をすれば「おれはイケメンだぜ」みたいなイメージを、ずっと出そうとすることって難しいことだと思うんですね。しゃべり方もこっちに振れば、イケメン度数が上がるけど、人によっては下がる、みたいなことにもなるので。それをうまくコントロール出来るっていうのは、すごいなって。DJというか、MCというか。

田中： ええ。

勅使河原： で、飽きないというのか。全然てっぺんにたどりつけないんで。上に上がってるつもりでも、ぜーんぜん上がれないんですよ（笑）

田中： あははは。

勅使河原： これはほんとに、10何年しゃべってるぼくと、例えば昨日始めた子っていうのを比べると、客観的には「10何年のこっちがプロで、昨日始めた方はど素人だろう」ってなるんですよ。だから普通は先輩から学べていうんですけど。まあ、それもあると思うんですけど。

田中： ええ。

勅使河原： でも、こっちが学ぶこともあるんですよ、1日目の人に。「わお！」ってのが出るんですね。

田中： へえ（笑） どんなところで？

勅使河原： ものの表現って、人それぞれじゃないですか。それこそ、ぼくずっとヒップホップ大好き子なんで、それが根底にあって表現の仕方も、他のDJと全然違うって言われるんですけども、自分からすると、ヒップホップムーブメントな流れから来てる、ご紹介の仕方だったりするんですよ。

田中： うん。

勅使河原： さっきの音楽と出身地の話だったりとか、そういったこと含めた話だったりするんですけど。これが世代によって感覚が違うじゃないですか。流行ってるものだったりも、最近の中学生に「音楽、なに好きなの？」って聞けば「ボカロ（ボーカロイド）」とって、もう人が歌ってないですよ、それ。コンピューターで打ち込んでメロディをつけていって。

田中： 「初音ミク」系？

勅使河原： そう。初音ミクとかなんですけど、そういうの聞くんすよ。もうびっくり仰天なんですけど、ぼくとしては。でも、その世代にしては、それがスタンダードじゃないですか。「ボカロ、聴いてる？」っていうのが普通なんですよね。そういう感覚の人が、ぼくと同じものを表現しようとする時に、ミラクルが。

田中： ぷ。

勅使河原： ぼくからすると、ミラクルが生まれるんですよ。

田中： 「そっちかー」みたいな（笑）

勅使河原： 「あー、俺知らなかった、そっち側」みたいな。表現方法として知らなかった。ある程度わかる枠の中にはまってくれば納得がいくんですけど。ポキャブラリーっていうか、自分の中にないものが出てくるんですよ。それを入れられたときには「そうかあ……」って、ぼくはそう思う。

田中： ふふふ。

勅使河原： 中には「そんな言葉は世の中にない！」って言い切る人もいるんですよ。国語の先生みたいな人とかは。でも、ぼくは世代世代で通じる言葉だと思っているから、ぼくとしては「あ、やられたな」って思ったりするところ。

田中： んふ。

勅使河原： 「この世代をガッチリ掴みたい」ってポイントで、ガッチリ掴まれるわけですよ、その子には。でも、ぼくは掴めないんですね。

田中： それはその世代の強みなんですね。

勅使河原： そうそう。そこの強みなんです。それが各世代によって。自分より上の先輩、上の



人たちが使っている言葉って、それこそNHKで出てくるバージョンだとか、いわゆる正しい日本語とか。表現とか、いっぱい出てくるんで。勉強したらわかるんですけど、下に下がって行くと、わかんないです（笑）

田中： わかんない、わかんない（笑）

勅使河原： 全然わかんなくて。でもそういうのも自分はいろんな子に話を聞いて、「知ってるはずだ」と思ってるんですけど、見学に来る小学生とかの子と話をして、いろんな雰囲気を感じているのに、やっぱりわかんないですよ。

田中： その時代に入ってるっていうのは、違うんですね。

勅使河原： 違うんです。でもその方がその世代には伝わるんですよ。みんなの使ってる共通言語なんで、その中では標準語なんです。言葉としては標準語なんだけど、伝え方っていうのもあるじゃないですか。

田中： ええ。

勅使河原： 「～ナウ」じゃないですけど、ツイッターの。

田中： 「ご飯ナウ」（笑）

勅使河原： 「番組ナウ」（笑）とかっていう言葉も活字とかで、ポンッとツイッターで出てきますけど、ある世代にとっては、あの言葉の順序が、あの認識だったりして「カラオケナウ」とかって言ったりするんだと思うんです。

田中： うん。

勅使河原： 自分たちもツイッターでそういうことしたりするんですけど、実際には相当酔っ払ってたり、ふざけて言うとかでしかなくて。でも、それが普通の人もあるんだなって。

田中： ですよ。パソコンのネット、2ちゃんの住人とかだと普通では使わない表現とか（笑）

勅使河原： その世界だけの表現じゃないですか。究極、上り詰めようと思うと、「全部のそういうところを知っていて、しゃべる」ってことが、究極だなと思うんで、一生てっぺんには登れないですよ。

田中： でもお、そういうの、おもしろいんですよね。新鮮じゃないですか？

勅使河原： 新鮮です。

田中： 「w k t k (ワクテカ)」とか。

勅使河原： はいはいはい。「これ、なに??」って思いますよね。「w k ??」

田中： そう (笑)

勅使河原： でも理にかなってるといとか、一種のマークじゃないですけど、絵文字みたいなものじゃないですか。最初「これ、押し間違えちゃったの?」って思うかもしれないですけど、それが当たり前の表現。

田中： すごいじっくりきいたりしませんか？ テレビで囁んじゃって、なに言ってるかわかんないけど、テロップで「えwOmd▽・m¥h。・9y j」なのが流れて「あーぴったり」みたいな (笑)

勅使河原： そうそう。こういう感じって思いますよね。

田中： うん。あの感覚って、おもしろいなって。

勅使河原： こういうしゃべる世界だと、そういうことを出来る限りの範囲で知っていないと、みんなに伝えることは出来ないかなって。

田中： あー。

勅使河原： 真面目な話、災害時にラジオが役立つとか、後緊急情報とか出したりするんですけど。それこそ東日本大震災の時も、割と普通にNHKは「津波情報が出ています」とかしてたんですけど、いろいろ見直されて、津波が来そうなときは、「強く言わなくちゃいけない」とか。流れで聞えちゃうんですよね。

田中： ああ。

勅使河原： 普通に「強い台風が来ているので、気をつけて下さい」って言われても「あ、台風強いらしいよ」って。そこを感じさせるのもスキルかなって思うんですね、しゃべる側の。前も

、結局は誤報だったんですけど、「大型の地震が来ますよ」って警告音と共に全国に出たんですよ。

田中： あー、携帯にも。

勅使河原： はい。みなさんの携帯も鳴ったと思うんですけど。その時のNHKの人は、すごく強く言ってますよ。怒鳴るような感じで。それは感情も伝わるといっか。そういうコントロールを、その時と場合によって、していかないといけな。そういうことも出来るし。

田中： ライブですよ。

勅使河原： そうなんです。そうなんです。だから自分についてきてもらいたかったら、そういうしゃべりをしなくちゃいけな。

田中： うん。

勅使河原： ぐるぐるぐるぐるむつかしい感じになっていくんですよ。このおしゃべりの世界を考えると。

田中： テレビだと、反応が見えますもんね。

勅使河原： そうです、そうです。

田中： 「あー、ちょっと伝わってないかな」とか。首かしげてたりするのが見えると、修正することが出来るけど。ラジオは見えないですもんね、リスナーさん。

勅使河原： さらにひとりでしゃべってるんです、この部屋で。で、なんか、こう、そこに慣れると、一段上に行くみたいな感じがあるんですね、ラジオは。DJとして。

田中： うーん。

勅使河原： ひとりしゃべりって、結構恥ずかしいんで。ひとりでウケたりしてるような話をしてるのを、後ろで聞いていられると恥ずかしいじゃないですか。「ひとりでウケちゃった」みたいな（笑）

田中： ふふふ。

勅使河原： 恥ずかしいんですけど、それが普通になってくるんですよね。DJやってると。

田中： ひとりで笑い声上げちゃったり（笑）

勅使河原： ひとりで笑いますよ。でも、全然ひとりで笑ってる気ではないですけどね、自分は。でも、そこに慣れるにはちょっと。いきなりは大変だなって思いますけど。

田中： うん。

勅使河原： そういうの全部出ちゃうんですよね。なんか、こう、裸にされちゃったみたいなの。丸裸なんだけど、実際の裸は見えない、と。でも、丸裸とおんなじ感じ、なんですよ。

田中： きっとねえ、情報が少ない分だけ使えるアンテナを研ぎ澄ますんですよね。

勅使河原： そうです、そうです。

田中： だから、みんなキャッチされちゃう。

勅使河原： だから適当なこともつなぎで言ったりするんですけど、適当だなって思われてのつなぎならいいんですけども、「なにか意図があって、このつなぎか？」って感じられると、違ったりするんです。なんか、難しいですよ。

田中： すべてが自分次第って感じですね。

勅使河原： そうなんです、そうなんです。だから人それぞれ評価があるので、「この人は、この番組に向いてない」と言う人がいる反面、「この人がいるから、聞くんだ」という人も同じぐらいいるし。それぞれの個性がちょこちょこ出てるんだなって。

田中： うん。

勅使河原： しかもそれを「聴いてる人が、感じてるんだな」というのを感じるんで。いつも恥ずかしいですよ（笑）

田中： あははは。

勅使河原： ぼくは完全にライブですね。

田中： うん。

勅使河原： ライブしてます。番組を進行するアナウンサーではなくて、「ミュージシャンがライブしてる感覚」で、生放送をやってるんで。いろんなタイプがいるんで、ピッチFMおもしろいですよ、っていう（話）

田中： ね。で、やっぱり、人間が一番おもしろいんですよね。

..... つづく ^^

◆人間ほどおもしろい生き物はない

勅使河原： そうなんですよね。そう。こんなにおもしろい生き物はいないなって思いますよね。

田中： みなさんそれぞれに経験されてきたことってあるんですけど、その経験を感じる度合いや捉え方が違ったりして、私、そういうのを観るのが大好き（笑）

勅使河原： なるほどお（笑） おもしろいですね、聞く方もおもしろいですよね、そういう話。

田中： 役職とかあったりすると、脱げずにお話しされるじゃないですか。

勅使河原： みんな、そうなんですよね。会社経営されてる方だとか。

田中： ええ。背負ってる看板は大切なんですけど、それだけが前面に来ると、取りつく島がないというか。同じように食べて、たまにはゲップしたりするのに、ちょっと違うみたいな。

勅使河原： はい。「おれはゲップはしない」みたいな。

田中： はい。昔だと「アイドルは〇しない」とか。それって、全然おもしろくない。だから、とりあえず「脱いじゃってくださいよー」みたいな感じで、お話を伺えるのが、とても楽しくて。

勅使河原： まんまと今日は丸裸にされた感じですね（笑）

田中： あははは。

勅使河原： ぼく、割と話すのはすきだし、聞くことになることもあるんですけど。

田中： ええ。さっきのお話しではないですけど、自分がこうだろうって思ってた反応と違うツッコミとか来た時って、もう、ワクワクするんです（笑）

勅使河原： もうすげえって思いますね（笑） ぼくも、そうです。ある程度プロだけが集まって、放送に乗った状態で話をする時は、おもしろいところも出つつ、うまいこと進んで行くんですよ。

田中： うんうん。

勅使河原： それはプロの世界では、予定通りです。みんなが予想する通りに進んで行くんですけど。これが、一般の人がいっぱい入った時の進み方って、結構ミラクルが起きるんですね。

田中： あははは。

勅使河原： もう、そこがおもしろいですよ、すごく。何が出てくるかわからない。「え？今それ言った？」みたいなことが出てくるんで、すごいおもしろいんですね。

田中： 話しながら、いろいろな記憶にアクセスしてるんですね。だから口はしゃべってるけど、頭は違う方みてたりするんですよ。

勅使河原： あー、それはありますね、うん。

田中： だから、ある時全然筋違いなんだけど、なんかポーンと出ちゃう。だけど、それって絶対どこかにリンクしてるんですよ。

勅使河原： うんうん。

田中： 記憶がたどって行って、ここ行って、あそこ行って、でも、出てきたのがこれなんですよ。

勅使河原： なるほどお。

田中： 口はしゃべってるけど、記憶はたどってるわけで。

勅使河原： つながってるわけですね。うんうん。

田中： だから、よく観ると、そのつながり具合、回線が見えるわけですよ。超おもしろいんです。「おー、そこにつながるんだあ」って。

勅使河原： おもしろいですねー。

田中： みんなそれぞれに回線があって。それが「違う回線なんだー」っていうのがわかった時に「どうやって、その回線がつくられたんだろう??」って思うと。

勅使河原： うーん。「このルーツは何？」みたいな。

田中： うん。興味は尽きないですね。仕事の、コーチングのセッションとかもはっきり言って「何が出てくるかわからない」世界なんですね。だから時々セッションで、クライアントさんが自分の「つらいな」って思うところにアクセスしちゃって、突然ストーンって落ちることもあったりするわけです。

勅使河原： おー。なるほど、なるほど。

田中： だから自分のあり方も結構試される仕事だったりしますね。

勅使河原： 自分も挑戦って感じですか？

田中： 挑戦というより、そういったものにひっぱられない。

勅使河原： あー、なるほど！

田中： 共感して同じものを観ることは大切だけど、一緒に落ちて溺れてしまったら「誰が助けるの？」って話なので。「命綱を持ってるから安心して、落ちていきなさい（笑）」みたいな、ね。

勅使河原： なるほど、なるほどね（笑）

田中： その人がどこに行くのかわからないっていうと、いつもライブみたいなね。

勅使河原： おー。同じですね、ラジオのDJとね。

田中： うん。だからなにが出てくるかわからないってものに対して、怖いって思っていると出来ない。

勅使河原： あー、そうですね。「なにが入ってるんでしょうか？」っていう箱に手を突っ込む、あの感じですね（笑）

田中： そうそう（笑） かみつかれるのか。

勅使河原： 「イタッ」てなるのか「ヌルヌルしてるー」「なんか柔らかい」ってなるのか。そうですね。でもそうかもしれないですねー。ラジオも収録するものは違うんですけど、生放送はやっぱり、いつ何が起きて、どの方向に行っちゃうのかっていうのが、いつもわかんないんで



、おもしろいですね。

田中： ね。研修とかもさせていただくんですけど。最初持ってくプログラムは練って行くんですけど、進行していく過程で軌道修正していく必要も。

勅使河原： あー、ですね。

田中： 放送の時も同じだと思うんですけど、集まられた方がどういったものを持っていらっしゃるのか、なにが出てくるかわかんないので。

勅使河原： わかんないですよ。

田中： そこで出されたものをスルーするわけにはいかないの、それをいかに食べれる状態にしていくかと（笑）

勅使河原： なるほど（笑） そうですね、そうなりますよね。なにかポーンと出されて「それはいいんだけどさ」ってわけにはいかないですよ。いったんは受け止めて。

田中： はい。ラジオのDJさんというお仕事も、そういったものではないかなって思いました。

勅使河原： うん。だからラジオとかも向いてるタイプだと思うんですよ。

田中： そうですか？

勅使河原： 話すのを生業、じゃないんですけど、中心にされてる人はあうんですよ。しかも大体の事は上手くやれるって感じですね。ラジオのおもしろいのは、生放送で、時間が「後、何十秒」って出てきますよね、時限爆弾的な感じとかも（笑）

田中： こわい（笑）

勅使河原： 「まだここだったな、この話で」とか。意外とトークのピッチが急に上がったりとか。

こっちの感覚的に「もっとゆっくり話を聴こう」というところから、サッとスピードが詰まったりとかってというのは、聞いててもわからないと思うんですけど、自分の中で、おもしろいです。

田中： うん（笑）

勅使河原： そういうワクワクじゃないですけど、ドキドキも感じられて。それが自分でどうにでもなる時間帯と、強制的にCMが決まっている時間帯が混ざってるんですよ、生放送の中に何個も。

田中： それは、ドキドキですね。

勅使河原： 「ちょっとだけはみ出そう」とか「今回は絶対吸い込まれちゃうから、このまんま終わんなきゃ」っていういろいろやってくるんで。そんな中、人としゃべってるんで。

田中： すばらしい。プロだ。

勅使河原： Mなのか、Sなのか.....みたいな感じだったりするんですよ、しゃべってる人って。

田中： あはははは。

勅使河原： あまりにもS的なことばかりだと、ちょっと変なふうに聞えちゃったりもすると思うんです。

田中： ぶ。

勅使河原： 自分が支配してるみたいな雰囲気出しちゃうと。だけど、M的な要素もバランスよく入ってるんで（笑）、人間っぽく上手く行くんだらうなって気がしますけど。

田中： きっと空気が読めるっていうのは、その時に必要な役割が。

勅使河原： そうです。そうです。

田中： チョイス出来るんですよ。

勅使河原： はい。いろんな役になるっていうか、タイプが臨機応変に。今日の3時間の中でも「えっと、俺は今日、これとこれとこれをやりました」みたいなことになるわけです（笑）振り返ると。

田中： あははは。

勅使河原： どの瞬間にどうなるかは、わかんないから、すごいおもしろいんですよね。

田中： うん。

勅使河原： こうやってしゃべっていると、世の中でもっと評価されてもいい職業かなって思うんですけどね。ラジオのDJさんっていうのは。

田中： そうですよ。そう思います。全身での表現だと思います。

勅使河原： そうなんです。ぼくはもう、丸裸でやってるような感じなんで。そんだけ出ちゃってるってことは、他の仕事にはないじゃないですか。バランス感覚も必要だし。

田中： ね。

勅使河原：ほんと、なんの話してんのかって話ばっかしてましたけど、いいですか？

田中： そんなそんな、全然。正しいです（笑）

勅使河原： 「みんなラジオDJ目指せばいいのに」って思いますけどね。男の人はね、これから目指そうとする人は早い段階から勝負に出た方がいい世界ですね。早くから攻め込んできた方がいい。特になりたいという夢がある人は。遠回りをして、ある程度経験値をつんでからここに座ろうって思っていると、現実とのバランスがとれなくなってくるので、その時には。

田中： わかる気がします。

勅使河原： 若い時からやってる人は、遠回りした人が入って来た時には、もう築き上げてるんですよね、その世界で。ある程度のポジションを確保できてる状況になるんで、そこからまた勝負が出来るんです。

田中： スピルバーグ監督は、小さい時から映画監督になるって決めていて、学生時代にユニバーサルに潜り込んで、空き部屋に居候とかしてたみたいですよ。

勅使河原： ほー。でもそういうことだと思っただけですよ。こういう業界は。

田中： 正攻法で行くという事もあるんですけど、糸井重里さんの本で、その世界で頭角を現してる人が必ずしも、その世界にみんなが通ってくる正規ルートで入って来ていなくて。資生堂のアルバイトから社員になった人の話をしてらしたんだけど。

勅使河原： ええ。

田中： 目端も利く人なんでしょうね。アルバイトで入ってて、撮影とかのスタッフの方のお世話をしたりしていて、飲み会の時とかに買ってくるおつまみのセンスがよかったから、アルバイトから社員に（笑）

勅使河原： あー、わかりますね。

田中： そういったところで「あー、あいつね」っていうのが頭に入る。

勅使河原： わかります。わかります。

田中： 聞いた話なんですけど、警察官が刑事になるのも、用事がなくても雑用とかしてその部屋に出入りして、顔を覚えててもらったりすると、引き抜かれやすいとか。

勅使河原： あー、なるほど。ちょこちょこ顔出して「あいつ、いいじゃないか」って。そういったことってありますよね。ぼく、事務所に入って訓練を受けたことないし。この世界入ってみて、学校卒業してきた人ばかりの世界だなんて思ってるんですけど。

田中： ええ。

勅使河原： よく「どうしたら、DJになれますか」って質問されるんですけど、「ピッチ、来たらいいじゃん」って言うんですよ。お給料払う仕事はないけど、「手伝いできるんですけど」とかって門を叩いてくれれば、いつでも出来る制度が、実はあるんですね。ボランティアスタッフさん、募集してるんですけど。

田中： そうなんですか？

勅使河原： そうなんですよ。その人が出来ることでいいんですよ。番組もいろんなのがあって、『市民チャレンジゾーン』っていう枠があるんですけど、ここで流れてるのは、全部ボランティアさんや市民の人たちが作ってるんですよ。

田中： へええ。

勅使河原： 番組を作る人たちもいるし、選曲だけする人もいるし。『今日は80'ポップス特集』って1時間番組を作ったりとか。その人に合わせたいろいろ出来ることを、こっちも提案

してやってくれると、こっちはうれしいなって。あっちも「こんなことが出来て、放送されるんだ」とか。

田中： ええ。

勅使河原： また放送とは全く関係なしにCDの整理をお手伝いしてくれる人とか。いろんな、誰でも来れるシステムにしている。

田中： うん。

勅使河原： あとから、これ画期的だなって思ったんですよ。DJ目指してる人とか、学校行っても教えてくれないのに、ピッチに来たら機材の使い方もおしえてくれて、CDもいろいろ選曲して音入れて1時間のものにする、という作業まで出来るようになるんですよ。こっちも教えるから。

田中： うんうん。

勅使河原： 番組作りもどんどん教えるからやれるようになっていくんですけど。実際に、経験値っていうのが一番すごいと思うんで。

田中： ええ。

勅使河原： 流れると自信もつくし、そんなの内側の人から見たら「え？ そんなの誰にでも解放してるだから、誰にでも出来るんじゃない」って言われるんですけど。そういう申し込みがあって、1回会って、どういう人かっていうのを、面接じゃないですけど（笑）

田中： うん。

勅使河原： たまにちょっと違う感じの、なにか違う目的を持ってる人もいたりするんで。そのためにちょっとベールに包まれてます。「ボランティアというのは、なにをやるか？」っていうのは。

田中： ふふふ。そっか。

勅使河原： こんなことや、あんなことや、なんでもありますよーとは言ってるんですけど、「実際、具体的に何をやるのか？」のメニューは出してなくて、会った時にお話をして、出来そうな人には「まず、こんなことしてみますか？」ってこっちから言うんですね（笑）

田中： へえ。

勅使河原： 「どうですか」って。で、「やってみたいです」って言われたら、好きな時にきてもらってね。1か月にこれが1個出来るくらいのペースでってお話になって。「ラジオ、やりたい」って思いの強い人は何かにチャレンジできるようにはなっているの。

田中： すばらしいですね。

勅使河原： それが、こう.....一番いいなって思ってるんですね。勉強だけじゃなくて「経験値、積んじゃえよ」みたいな。ボランティアさんが作ると、タイトルは載らないんですけど、自分の中で自分の番組が流れるって。

田中： すごくいいです。何かを作り上げるって、いいですよ。

勅使河原： そうそうそう。本物になっていくわけなんで。ピッチの解釈として、これが市民のボランティアのゾーンっていうだけですけど。これすらも知らないところからしたら、明らかに、ラジオのDJなんですよね。その自信とそれをやってるという経験を元にほかを狙うという手はあるし。

田中： ええ。

勅使河原： 地域のやりたい人がいたら、どんどん来てほしいなと。こんなお話でよかったんでしょうか。

田中： 全然。素晴らしいです。どうもありがとうございます。あの、後少しよろしいでしょうか？

勅使河原： いいですよ。

田中： ありがとうございます。

..... つづく ^^

こちら、好奇心でかきだした質問表です^^

勅使河原さんにもインタビュー後、おつきあいいただきました。

まずはどうぞ、みなさんもたのしんでくださいませ★★

### <いろいろ質問表>

- ・月並みですが、小さい頃はどんなこどもでしたか
- ・好きな本を一冊選んでください
- ・いつも必ずする「習慣」はありますか
- ・ねこ派ですか？いぬ派ですか
- ・今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか
- ・それのどの部分が大変だと感じたのでしょうか
- ・それをどうやって乗り越えたんですか
- ・その時、大切にしていたことは何ですか
- ・今頭の中にうかんでいる人はだれですか
- ・その人は、何か言っていますか
- ・3つ願いが叶うとしたら、何を願いますか
- ・人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか
- ・人として、これは譲れないっしょ??っていうのがあったら、何ですか
- ・RPGでパーティを組むとしたら、どんなキャラクターを選びますか
- ・因みにそのなかで、あなたの役割（キャラ）はなんですか
- ・それはどんな冒険になるのでしょうか
- ・「攻め」と「守り」自分はどちらだと思いますか
- ・全く何の制約もないとしたら、何をしますか
- ・聞くとムカッってくる言葉ってありますか
- ・どんな時にイラッとしますか
- ・落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか
- ・何をしている時が一番たのしいと感じますか
- ・今一番欲しいものは何ですか
- ・あなたの萌えポイントをおしえて下さい
- ・今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、2つ語って下さい
- ・そこで何に気付きましたか
- ・今の自分を突き動かしているものは、何だと思いますか
- ・今死んでも悔いはありませんか
- ・身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか

- ・世界に向けて演説をするとしたら、何を一番伝えたいですか
- ・生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか
- ・人間以外のものに生まれ変われるとしたら、なにがいいですか
- ・朝起きたら、雨が降っていました、どんなことを思いますか
- ・世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか
- ・自分の性格を象徴するようなエピソードがあったら、おしえてください
- ・自分のキャラを一言でいうなら
- ・今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか
- ・今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったらおしえてください
- ・一年後、どんな自分にいるでしょうか
- ・最後に何か一言お願いします ^^

..... つ

づきは勅使河原さんのおこたえデス ^^



田中： 小さい頃はどんなお子さんでしたか。

勅使河原： 小さい時ですか。負けず嫌い（笑）

田中： さっきのお話にもありましたね（笑）

勅使河原： そうそうそう。ほんとに負けず嫌いでしたね。兄弟でのカードゲームでも、負けたくない。

田中： 何人兄弟なんですか？

勅使河原： 3人兄弟ですね。妹が2人いるんですけど。

田中： お兄ちゃんだ。

勅使河原： はい。ほんとに負けず嫌いで、「ババ抜きで上がれなかったのがくやしい！」みたいな。

田中： ぷ。毎日ははじけてる感じですね（笑）

勅使河原： はじけてましたね。元気がいい子どもでしたね。

田中： うん。

好きな本を一冊選んでください。

勅使河原： 好きな本を一冊、好きな本を一冊、これ、難しいな……とんでもないこと、言っているんですか？

田中： いいですよー（笑）

勅使河原： 『はらぺこあおむし』、絵本（笑）

田中： あー。うちもありますよ。

勅使河原； あれ、好き。今、大人っぽいのを言った方がいいかなって思ったんですけど。

田中： 全然、そんなの。きれいな色の絵本で。あれはいいですね。名作ですね。

勅使河原： はい。あれはすごいなって思って。ここ最近グッズも出たり、絵本もサイズがいろいろ出たりしてますけど、なんか子供の時から、たぶん好きだったんでしょうね。で、大人になっても、好きで。

田中： うん。

勅使河原： 絵本、いっぱい見たのにしっかりストーリー覚えてるのって、あんまりなくて。でも、あれは覚えてるんですよね。

田中： 私、『100万回生きたねこ』

勅使河原： あ、はいはいはい。あれ、ぼく、子供心に大人の見本みたいな感じがしてたんですね。

田中： 作者の佐野洋子さんも、なかなか潔い方で。もうお亡くなりになったんですけど、がんで余命宣告されてから、ブリティッシュグリーンジャガーのジャガーを買いに行かれたとか。あれは、私にとっては、浄化の本ですねえ。

勅使河原： へえ。すごいですね。ぼくの人生で一番インパクトのあった本っていうのは、『はらぺこあおむし』だったなっていう。未だに愛されてるじゃないですか。シンプルなストーリーで、流れがきれいだなって。

田中： うん。すごくいいと思います。

3つ願いが叶うとしたら、何を願いますか。

勅使河原： 3つ願いが叶うとしたら、3つ願いが叶うとしたら……これ、難しいなあ。

田中： あはははは。

勅使河原： うーん。でも日常的なことのような気がする。叶えてほしいことって。すごい壮大な「こんな事になりたい」とかじゃなくて、身近なこと。それこそ「今日の夜は鰻を食べに行きたい」とか、そういうレベルです、ぼくは。

田中： うんうん。全然いいです（笑）

勅使河原： なんだろな。今だと、暖いところに海外旅行行きたいとか。旅行が好きなんで、旅

行に行きたいですね。「なんの心配もなく、旅行に行きたい」ので、いっす（笑）

田中： 人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか。

勅使河原： これ、先程からよく出てきた「バイブス」（笑）

田中： あはははは。

勅使河原： これ、みてるっていうか、感じてるっていう感じですよ。

田中： うん。

勅使河原： だから「みてますか？」に対して正当に答えるなら、それこそ、微妙な感覚が合わさった、その人が出してるもの。それを「バイブス」って言葉で片付けちゃってるんですけども（笑）その人が醸し出してる、なにか。

田中： うん。

勅使河原： 言葉で表現しづらいから、そういうことになってるんですけど（笑）別に何を見てるっていうわけでもないですよ。全体。

田中： そこからなにかキャッチしてるんですね。

勅使河原： そうです。それが……『バイブス』（笑）

田中： バイブス（笑）RPGってされますか？

勅使河原： あー、ゲームは昔すごいやってましてけど。音楽やるまではやってましたけど、パズルゲームぐらいしかやらないですね。

田中： いや、RPGゲームでパーティを組むとしたら、どんなキャラクターかなって。

勅使河原： パーティ。いや、ただただ明るい感じだと思いますけど。賑やかなこと好きなんで。なんか。アメリカ人みたいって、よく言われますからね（笑）

田中： あははははは。「ウケる技術」だと「ウケるためにはアメリカ人になれ」「テレが入っちゃダメだ」みたいな（笑）

勅使河原： そんな感じですね。全然テレないし。

田中： ふふふ。

攻めと守り……ご自身はどちらだと思いますか。

勅使河原： 攻めと守り。基本は攻めだと思いますけどね。いつも攻めてる感じはするんだけどな。

田中： 全く何の制約もないとしたら、何をしますか。

勅使河原： 何の制約もないとしたら、裸になりますね（笑）

田中： あはははは。裸族ですか（笑）

勅使河原： そうですね。なにも隠すものがないみたい。それに対して怒られなかったり。

田中： うん。

勅使河原： 普通、犯罪じゃないですか。そうじゃなかったら、「着飾るより、裸になれよ」と（笑）すべてをさらけ出すというのか。

田中： じゃあ、心になにも着せないとかではなく、ほんちゃんに、マッパになりたいと。

勅使河原： そう。マッパに。イコール全部出しちゃうことだと思うんですけど。「いいふうにみせようとか」「カッコよくしようとか」とかは最近あんまりなくて。ありのままというのか、素のままというのか。そういうのが楽しくあったりすればいいなって。

田中： ええ。

勅使河原： なんか聞かれて隠すようなことも何もないし。そういう感じですね。裸になります。うん。

田中： あはははは。

勅使河原： 裸になるって言っても、今見せられる身体してないですけどね。そういうことも考えない感じです、今ね。

..... つづく ^^

田中： そっか（笑）

聞くとムカッってくる言葉ってありますか。

勅使河原： ムカッってくる……。なんかね、人のせいにするじゃないけど、なにかが起きた時に「あいつのせいで、こんななって」って怒ってる人がいるんですけど、その人に怒れちゃう。聞くと「いやいや、そんなはずはない」「自分にも少しは原因があるし。ちょっとは考えてみたかい？」って思う。

田中： 笑

何をしている時が一番楽しいと感じますか。

勅使河原： おいしいものを食べてる時は、楽しいですね（笑） 意外と食べるのが大好きなんで、大きくなってらんですけど。食べるのが中心にあるアクション。旅行とか「あれ、食べたいね」って言って旅行に行くとか。「そこ行って、あれ食べたーい」が海外旅行につながったりとか。買い物したいとかじゃない。おいしいもの、まだ感じてない味を感じたりとかにしあわせを感じますね。

田中： うん。

勅使河原： それを共感できる人と一緒に行ってるのが、最高にしあわせですね。

田中： うーん。そうですね。倍になりますからね。

勅使河原： そうです。ノリノリで一緒に行ける人と行くのが一番、しあわせ。

田中： うん。

今一番欲しいものは何ですか。

勅使河原： 欲しいものですか。最近あんまり物欲ないのかなって思っちゃうすね。欲しいもの。すごい単純な質問をされたと思ったのに、すげえ難しい感じがするんですけど。

田中： 笑

勅使河原： 一番欲しいもの……。なんでしょうねえ……。隠れ家。

田中： 隠れ家??

勅使河原： 全部さらけ出すって言ってるのに、隠れ家（笑）

田中： あはははは。

勅使河原： 隠れ家的な。自分のホームグラウンドじゃないですけど、遊びに行くお店だったりとか、そういうのが今少なくなってきた。

田中： うん。

勅使河原： 昔は自分と自分の友達だけで、そこ行ってるっていうのがあったんですけど、いろんな人を連れて行ったりすると、みんなのお店になっちゃったりするじゃないですか。

田中： あー。

勅使河原： 結局ぼくがそういうところ、見つけたなって思っても「そういえば、テシはこういうやつなんだよ」って、一緒に行った人に説明されたりすると、そこに行っても「みんなのテシ」みたいになっちゃうんで。何しゃべっても大丈夫な、遊び場。

田中： うん。

勅使河原： .....を確保したいですね。

田中： それは、必要ですね。

勅使河原： ぼく、ひとりぼっちもいいんですけど、意外と誰かと乾杯してたりとか、しゃべってた方がいいですね。ひとりですーっと家にいると、さびしいですね。

田中： ふふ（笑）

今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、2つ語って下さい。

勅使河原： 2つ。まずは、昔の音楽活動でCD出した、あのグループ。

田中： うん。

勅使河原： もう、最大級。未だに影響があると思っているので、それと。あとは、結婚かな。大きな影響は。

田中： ひとつめ？

勅使河原： ひとつめ。うん、ふたつめはまだ始まったばかりなんで（笑） なんとも言い難いんですけど。

田中： おめでとうございます（笑）  
今死んでも悔いはありませんか。

勅使河原： ないですね。

田中： ないですか。

勅使河原： はい。いつもないです。

田中： 新婚さんなのに？

勅使河原： うん。そのね、さみしさはあるんですけど、「なんかやり残したぜ」みたいなものは。いつも全力投球なんでしょ。今日が終わったら、「今日死んでも、しょうがねーな」って思える。

田中： 即答でしたね、今。  
身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか。

勅使河原： 何をするんだろうな。好きなところに行って楽しむ感じですかね。行きたくても行ってないところとか、あるので。行けるだけ行く。あと1か月ってわかったら単純明快じゃないですか。

田中： うん。

勅使河原： 出来るだけ「こことここ行って、最期戻ってきて死ぬかな」みたいな（笑）

田中： かるーい（笑）

勅使河原： そういうスケジュールですね。で、そのスケジュールは上手いかわからないんですけど。たぶんね。どっかが気に入っちゃって。

田中： あー、そこにずっといたくなっちゃって。



勅使河原： 滞在が長くなっちゃって、上手く周れなくて（笑）

田中： 「でも、ま、いっか（笑）」って。

勅使河原： でもいい（笑） きっと、そう思って動き出すという事で、もう満足してると思う  
んですよ。そんな感じですね。

田中： 世界に向けて演説をしたら、何を一番伝えたいですか。

勅使河原： 世界に？「わるい人は、いない」

田中： 生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか。

勅使河原： 男。

田中： 即答なんですね（笑） 女はお嫌ですか？

勅使河原： いや、嫌じゃないんですけど、「どっちか？」って言われたら、男がいいです。

田中： また今と同じな感じの人生になりそうですね（笑）

勅使河原： うーん。今よりも刺激的になってると、楽しいですけどね。

．．．．． つづく ^^

田中： 今も十分楽しそうですよ。

人間以外のものに生まれ変われるとしたら、なにがいいですか。

勅使河原： 人間以外のものかぁ……海じゃ、ないっすか。

田中： へえ。海。

勅使河原： 笑 「海ってどういう訳？」って言われるかもしれないけど（笑） なんか「ものじゃねーな」と思って。「飛行機になりたーい」「車がいい」とかじゃないし。

田中： 無機物（笑）

勅使河原： 「木じゃねーな」って（笑） 「あ、海かな。海がいい」って思いましたね。

田中： 世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか。

勅使河原： 完全に消滅させられるとしたら？ それねえ、いろんなのがあると思いますけど、飢えかな。ものが食べられなくて、死んでしまうとか。

田中： うん。

勅使河原： 争いとか、戦争をなくすっていう人もいるかもしれないですね。飢えちゃうっていう状況を無くした方がいいなって、ぼくは。

田中： 今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか。

勅使河原： 家族っすね。奥さんだけじゃなくて、親兄弟とかが、やっと大切に思えるように。純粹に。ちょっと整えて、きれいに聞こえるように発言しようとか、そういうのではなく。家族かなって感じですね。ようやくそういうふうになったんでしょね、たぶん。

田中： ふふふ。今まで直感であったりとかで、思いつくままにいらしてたから、きっと周りというものを観られていなかったんじゃないかなあと。

勅使河原： そうそう。それこそ、いるのが当然で。「帰ったら、いるし」みたいな。だけど、最近ぼくも30代中盤になってきて、「親だって、いつまでいるか、わからないし」とか、周りで同級生が亡くなったりということが起こったりして。

田中： ええ。

勅使河原： 意外と……その言葉知ってたけど大事だよね的な。

田中： こう、実感というか、腑に落ちてきたとかが、あるかもしれないですね。

勅使河原： そうそう。「自分も、後どれくらいだろうか？」っていうのも、チラついたりもたまにするんで。「いつでもいいけど、あとどれくらいなんだろうな」って思った時に家族の事思うと、「家族って、すごいな」って。ぼくはほんと、くしゃくしゃやってるんで（笑） 破天荒な感じで。

田中： ふふふ。

勅使河原： でもスタンス、変わらずにいるんですよ。何かが起きて関係性が悪くなったりとか、過去にないんですけど。ずっと変わらないポジションをキープしてる。母親は母親。父親は父親。妹たちも妹なんですね。そのポジションのまま、行ってる。そういう面では、すごいなあっていうのを最近感じてる。

田中： さっき1回目のご結婚で「ちょっと考えてみる」っていう、半歩遅らせるというところで、周りが見える余裕が出来たみたい。なんか、そういうのも関係してるかもしれないですね。

勅使河原： そうそうそう。たぶん、そうですね。単純な生き物なんで、そういうところから来てるんでしょうね、たぶん。

田中： ふふふ。

今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったら教えてください。

勅使河原： おもしろいお仕事されてるなってことに、気づきましたね。

田中： あはははは。

勅使河原： いろんな人を観ることって大事だけど。ぼく、接客業とかをやった経験があるんでいろんな人をみたことはあるんですけど、お客さんと店の関係じゃないですか。でも取材ってなると、もっと踏み込んで行ける、「踏み込んでいいですよーポジション」で行けるっていうのって、おもしろいだろうなって。

田中： おもしろいです（笑）

勅使河原： ですね。それを感じました、今日。なんか「なにしゃべってんだ」って感じだったかもしれませんが。

田中： いえ！ 全然。すごくおもしろかったです。

勅使河原： ぼくもおもしろかったです。

田中： 今日は本当にありがとうございました！

最後までお読みいただきましてありがとうございました。

今回、あなたの心の内側では、どのような気づきがありましたか。

少しでもみなさまのお役に立てましたら幸いです。

さて、私にはこのインタビュー記事の電子書籍出版のほかに、

『コーチング』という専門職の顔も持っています。

実は、今お読みになられたインタビューそのものも、このコーチングの考え方に則って行っています。

コーチングとは、人材開発のための手法のひとつで、

おもに対話によって相手の自己実現や目標達成を図る体系的な技術のことです。

相手の話を聴き、感じたことを伝えて承認し、相手に適切な質問をすることで、

クライアントの自発的な行動を促していくことができます。

日本にはいくつかのコーチングスクールがあります。私はCTIというコーチングスクール

でCPCC（Certified Professional Co-Active Coach）という国際資格を取得しています。現在、日本では約550人のコーチがCPCCの資格を取得し、世界中では6,900人のコーチがこの資格を持って活躍しています。（2014年6月現在）

また、『人間の脳の取り扱い説明書』とも称される実践心理学 『NLP（神経言語プログラム）』も学び、

米国NLP協会認定トレーナーアソシエイトの国際資格も取得しています。

このNLPとコーチングはとても親和性が高く、相互に相乗効果を発揮して、クライアント様の変化変容、

目標実現に大きく寄与していると評価を頂戴しています。

その他、ソースワークショップトレーナーの資格も取得しており、クライアント様に

「本当に生き甲斐のある人生とは何か」を見定めていただくためのサポートもさせていただいております。

しばらく新規クライアント様の募集は諸事情によりおやすみをさせていただいておりましたが、このたび、また新規クライアント様の募集を再開させていただくことになりました。

もし、少しでもご興味やご関心がおありでしたら、無料体験コーチングを受講なさってみませんか。

今なら1回60分のコーチングセッションを無料でお受けしております。

これまでも、たくさんの経営者様、事業家様、サラリーマンの方、もちろん主婦の方々までコーチングをさせていただきました。柔軟なアプローチと揺るぎない信頼関係。これが私のコーチングのスタイルです。

あなたの目標達成はもちろん、日常生活でのメンタル調整に、思考や判断の整理に、コーチングやNLPは素晴らしい効果を発揮します。私にあなたのサポートをさせていただけるのであれば、これに優る喜びはありません。あなたからのお問い合わせを心からお待ちしています。

無料コーチングセッション、その他のお問い合わせはお気軽にこちらから。

< [ace-support@samba.ocn.ne.jp](mailto:ace-support@samba.ocn.ne.jp) >

最後までお読みいただきましてまことにありがとうございました。

ハタラクヒトペディア電子出版

記者兼編集長 田中永子